399
TA17

0058265000

0058265-000

３９９－Ｔａ１７ウ

東洋古兵法の精神

多賀義憲・著

北光書房

昭和１８

AJI

この著作物は、著作権者不明のため、著
第６７条の規定に基づき、平成１２年３
けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

孫子

軍爭

昔之善戰者。先爲不可勝。以待敵之可勝。不可勝在己。可勝在敵。故善戰者。能爲不可勝。不能使敵之必可勝。故曰。勝可知。而不可爲。

孫子曰。凡用兵之法。將受命於君。合軍聚衆。交和而舍。莫難於軍爭。軍爭之難者。以迂爲直。以患爲利。故迂其道。而誘之以利。後人發。先人至。此知迂直之計者也。軍爭爲利。軍爭爲危。舉軍而爭之。則不及。棄輜重而爭利。則輜重捐。是故卷甲而趨。日夜不處。倍道兼行。百里而爭利。則擒三將軍。勁者先。罷者後。其法十一而至。五十里而爭利。則蹶上將軍。其法半至。三十里而爭利。則三分之二至。是故軍無輜重則亡。無糧食則亡。無委積則亡。

故不知諸侯之謀者。不能豫交。不知山林險阻沮澤之形者。不能行軍。不用鄉導者。不能得地利。故善用兵者。動如雷霆。靜如處女。其疾如風。其徐如林。侵掠如火。不動如山。難知如陰。動如九天之上。故善用兵者。能使人無智。人無勇。人無功。故其戰勝不忒。其所措勝。勝已敗者也。故善戰者。勝敗已敗者也。見勝不過衆人之所知。非善之善者也。戰勝而天下曰善。非善之善者也。故舉秋毫不爲多力。見日月不爲明目。聞雷霆不爲聰耳。古之所謂善戰者。勝敗易勝者也。故善戰者之勝也。無智名。無勇功。故其戰勝不忒。不忒者。其所措必勝。勝已敗者也。故善戰者。立於不敗之地。而不失敵之敗也。是故勝兵先勝而後求戰。敗兵先戰而後求勝。善用兵者。修道而保法。故能爲勝敗政。

63 96

969
63

疾如風徐如林侵
掠如火不動如山

信長天下布武印と信玄の旗

形中是一箭鏃日知錄謂是鏃出之音訛

鏃者像文有刀劍之象是鏃固風雷隱而成者天地間有此字古文遺漏不一而不問可書

度度生量量生數數生稱稱生勝故勝兵若以鎰稱敗兵若以銖稱勝者之戰若決積水於千仞之溪者形也

射般子

制談

凡兵制必先定制先定則士不亂士不亂則刑乎明金鼓所指則百人盡鬬陷行亂陣則千人盡鬬殺將則萬人齊奴天下莫能當其戰矣古者士有什伍車有偏列鼓鳴旗麾先登者未嘗非多力國士也

先死者亦未嘗非多力國士也損敵一人而損我百人此貪敵而損我甚焉世將不能禁征役分軍而逃歸或臨戰自北則逃傷甚焉世將不能禁殺人於百步之外者方矢也殺人於五十步之內者矛戰也將已鼓而士卒相顧拗矢折矛抱戟利後發戰有此數者內自敗也世將不能禁士失什伍車失偏列奇兵捐將而走大衆亦走世將不能禁大將能禁此四者則高山陵之深水絕之堅陣犯之不能禁此四者則亡舟楫絕江河不可得也民非業死而黑生鬼哭今明法制審賞罰能使之前明賞於朝決罰於後是以發

有以論

不國本

松宮觀山自畫像

松宮觀山自畫像

觀山は兵法を北條氏長の季子氏如に學ぶ。（氏長は山鹿素行の兵學の師であつたことと人のよく知る所である）

觀山の日本的兵學は其の神道に關する造詣に由來するところが多いと思はれる。

觀山はまた和歌を加藤枝直（橘枝直）に就いて古體風を學んだが、其作風は必ずしも古風に泥まない。

畫も狩野派を學んでなかなか上手であつた。

玆に掲ぐる肖像は、觀山自畫の壽像で、原德齋著柳川重信畫の先哲像傳より採つたものである。

「原圖は鉉甲の形なり。憚る事あれば、今面目を存して、新に服を替ふるのみ。圖上に自題の語あり。細畫着色、目を驚かすばかりなり。」と德齋は記してゐる。其の圖上に題する觀山の自贊といふは次の如きものである。

這田令翁書籍蠹蟲、叨鉉二介冑一氣吐二白虹一、魏レ仁懷レ義、爲レ國欲レ忠、肅顧二天眷一、潛奏二斯衷一、樗散自安、何問二窮通一、驅羊年徒積、慚乏二識功一、光陰電駛萬年歸空、丹青寫レ眞、以示兒童。

延享丁卯五月、東野逸叟菅俊仍舊貫父自畫並題。

以て觀山の風格を想見するに足ると思ふ。

延享丁卯は延享四年、皇紀二四〇七年にして、觀山六十四歳の時である。すなはち右に示すところは觀山六十四歳の自畫像である。因みに觀山は九十六歳の長壽を保つて、其の歿したのは安永九年六月であつた。

自序

著者は曾て經濟學部を出たもので、專門の兵家ではないが、事變後間もなく上海にわたつて、某學院につとめてゐる間に、孫子の兵書にしたしむ機緣を得、つゐで某部隊の參謀部囑託として、軍務の一端に、いささか鞅掌するにあたり、それが如何に今日もなほ活用できる兵書であるかを、つぶさに身を以て體驗したものである。私自身には、變に應じ事を處する上に、ほんとにどれだけ役立つたか知れない。

しかしながら、これらの體驗に就いて語るが如きは、おこがましき事であり、本來私の柄でもない。すぐれた專門の深い體驗者がいくらもある筈である。

況んや、孫子の註釋書例解書の如きは、すでに世に數へ切れない程出てゐるではないか。

これらの孫子なら私自身も大抵渉獵して讀破したつもりである。もう澤山である。どれもこれも似つたりよつたりの大同少異といふ感を禁じ得ざる底のものばかり。所謂正を以て合ひ、奇を爲して勝つべきを說く兵書に就いて書くのに、これでは餘りに術がなさ過ぎると思ふ。

まことに、註釋書例解書の類はすでに積んで山を成すが、孫子の名文章に就いて、其の兵法的文章法を縱橫に解剖し評論して、其の妙味を玩味させてくれやうとする書物は一つもない。

宇句の穿さくや、實例の證明は、微に入り細にわたり、いはば毛細管の末梢はこまかに圖示してくれてゐるが、孫子兵法の根本的な考へ方、基本的な論理の骨格や大動脈を鮮明に把握させてくれるやうな解剖學的な書物乃至は孫子兵法の根本精神と其の背景を理解させてくれるやうな生理學的な書物は少しも出てをらぬ。

孫子を讀むに、更に大事なことは、いな最も肝要な事は、孫子の兵法が支那ではどうなつたか、日本はこれをどういかし、どう活用したか、日本固有の古兵道・古兵法の精神と孫子兵法との關係はどうか。我々は孫子兵法をどう見るべきか、其の見方の問題。等々の比較研究と、それによつて、我々の取るべき正しい日本的な立場を闡明する事でなければならぬ。

貧弱ながら著者は上海滯在中における自らの體驗を經とし、德川時代における先賢の孫子研究に對する歷史的考察を緯として、これが研究を試みるもの多年、漸く自信ある解決に到達し得たりとひそかに確信するを以て、淺學菲才を顧みるにいとまなく、敢て此の小著を世に問うて、大方の叱正を仰ぐと共に、世の孫子註釋書例解書と相俟ち相補つて、從來の缺漏部面を裨補するに、いさ

さか寄與せんと欲する次第である。

孫子の研究を中心とはしてゐるが、本書の期する所は、「東洋古兵法の精神と其の復興に關する研究」であつて、單なる孫子の註釋でも例解でもなく、それらとは最初から其目的を異にするものである所以を明かにして、此の序文の筆を擱くことにしたいと思ふ。（七月四日記す）

凡例

一、これを平たくいへば、第二篇は孫子の考へ方、第一篇は孫子の文章法を論じ、第五篇において、孫子をどう見るべきかの見方を說いた。そして、第四第六が日支比較篇である。註釋書例解書のいづれにも見られぬ本書獨自の特色がこれらの諸篇に一目瞭然のことと信ずる。

二、附錄の第一、動物の迷彩色は全く著者獨自の研究に成るもの。但しここには其の一端をさしばさみたるにとどまる。

三、附錄の第二、兵法餘話はいかなる讀者にもすらすらとおもしろく讀んでいただけやうと思つてゐる。

四、所々に挿入の寸言短句はすべて著者の作である。

目次

一、孫子文章の妙味

孫子文章の妙味……一
孫子兵法の文章法……八
日本海海戰第一報の文章法……一一
秋山參謀名文の祕訣を語る……一四
孫子兵法の逆說……一八
孫子兵法の比喩……二三

孫子兵法の文章と數字……二六
百發百中と百發一中……三〇
孫子の文章と必（トツ）の字……三三
素行・白石・徂徠の孫子文章短評……三五
孫子と文豪賴山陽……三八
孫子軍形篇に對する山陽の文章評論……四二

二、孫子兵法の精神

——孫子兵法の考へ方——

孫子兵法の基本論理……四六
孫子十三篇……五八

孫子兵法死活の一句……五九
守則不足攻則有餘に就いての白石の所見……六五
攻守の關係……六七
奇正……七〇
虛實……七四
視生處高の古義・原義……七六
兵者詭道也の古義・原義……七八
偶中と必中……八〇
孫子の必勝主義……八二
孫子の語句六題……八六
六書は孫子の註釋に過ぎず……九一

——七書の隨一としての孫子——

三、孫武の人柄

孫武の人柄……九八
白石の孫子人物論……一〇一
五徳五危の説……一〇三

四、孫子兵法と支那

聲を先きにして實を後にする支那兵法……一〇八
——史記と潘岳の詩に表現されたる支那兵法——
孫子兵法の漫畫化的實演……一一五

支那知行説（チコウセツ）の弱點……一一七

五、日本古兵法の精神と其の自覺・復興

——德川時代における孫子研究——

孫子兵法は日本古兵道の一註釋に過ぎず……一二三
——孫子研究と日本古兵法固有の精神との關係——
德川時代における孫子研究……一二六
兵者詭道也の解釋における素行と徂徠の比較……一二九
兵者詭道也の解釋における白石と徂徠の比較……一三一
徂徠の日支兵法比較研究の檢討……一三四
日本に陣法はなかつたといふ徂徠の錯覺……一三七

素行と日本古兵道の自覺……一三八
日本古兵法固有の精神を闡明宣揚した觀山……一四一

六、日本と孫子兵法の活用

東郷大將と孫子の兵書……一四八
孫子の兵法と未發の中……一五〇
マカロフの敗因……一五三
勝つ者は斯くの如し……一五五
兵法と死生……一六二
七分三分の叶合……一六五
思ふ壺……一六七
だし抜く……一六八
手段……一七〇
虚をつくらぬ一工夫……一七二
兵法數字漫談……一七四
兵法と目……一八〇
忍術……一八二
戰爭と足……一八六
蠍戰法四例……一八九
窮通の理……一九三
窮通の理數……一九九
窮通と屈伸……一九九

七、附錄　動物の迷彩色

動物の迷彩色……二〇二
ボルネオ雉・臺灣雉の迷彩色……二〇三
八色鳥の迷彩色……二〇七
サカマタの迷彩色……二一〇
アバチャンの迷彩色……二一二

八、附錄　兵法餘話

弱はり目に強味の賴朝・家康……二一六

瀬戸內海戰史の二齣……二一九
信長の天下布武……二二〇
月に貝を吹いて……二二一
昔の戰國時代と金銀……二二三
信玄と家康との對局……二二六
氏直・幸村の積極的戰策……二二七
回天艦長甲賀源吾艦上戰死の詳報……二二八
大村益次郎の銅像に題す……二三二
彌助砲……二三二
參謀と煎豆……二三三

圖版目錄

口絵　信長の天下布武印と信玄の旗
北齋筆　陣貝と太鼓
賴山陽「古文典刑」孫子の章　其一
同　上　其二
松宮觀山自畫像並に解說

挿畫並に表

詭の字の解釋表
徂徠著鈐錄自序の年記
德川時代の孫子研究家表
丁字形戰法の手の句圖解
所謂一向二裏一ノ谷の攻圍戰略圖說

サソリ並に蠍戰法の圖
シノリ鴨の迷彩色圖解
臺灣雉の迷彩色圖解
八色鳥の迷彩色圖解
サカマタの迷彩色圖解
アバチヤンの迷彩色圖解
キハツソクの迷彩色圖解
寒鯛幼魚の迷彩色圖解
法螺貝と角笛の角の圖解

東洋古兵法の精神

多賀義憲著

一、孫子文章の妙味

孫子文章の妙味

著者は專門の漢文學者ではない。著者が出たのは經濟學部であつた。しかも漢文を讀むのは昔から好きで、事變後間もなく上海の學院につとめるやうになつてからは、それが一層甚しく、殊に先秦文學の古漢文を渉獵玩味するには、殆ど其の飽く所を知らぬ。

老子の文章は韻をふくんで朗々長詩の如く、これに對して論語は簡潔にして詩趣を含蓄し、また哉(カナ)字を多く用ひたりするところ、日本の俳句に似たるものがある。

正々堂々の論陣を張つて、結構の雄大なるは何といつても韓非子を推さねばなるまい。孟子は支那人ですらが評して、「辯を好む者」といつてゐる位、また議論文の雄なるものではあるが、その結構の雄大さにおいて到底、韓非子の敵ではないと思ふ。

韓非子の正々堂々、正筆の議論文に對し、奇想天外の寓話をもつて、人の意表を衝くの奇筆を用ふるに巧みなるは莊子の妙文である。

始計篇に始まつて、用間篇に終り、所謂常山(ジヤウザン)の蛇の如く首尾相呼應する孫子兵法十三篇の文章に至つては、正奇縱横、「紛々紜々(フンフンウンウン)として鬪ひ亂れて、亂るべからず、渾々沌々(コンコントン)として形圓にして敗るべからず。」まさに韓非子の正筆に莊子の奇筆を兼ね備へたるの概がある。

まことに孫子の兵法は其の文章の如く、孫子の文章は其の兵法の如く、渾然一體をなした名文章である。蓋し古漢文中の第一等であらう。

著者はこれを孫子の兵法的文章法と呼んでゐる。

墨翟(ボクテキ)は古代支那一の科學者である。その文章法は科學者たるにふさはしく、

その論理の整然たることにおいて、數字の巧みなる利用において、譬喩に規矩其他の工匠具を好んでよく引例することにおいて、大いに特色を發揮してゐる。著者はこれを墨翟の科學者的文章法といつてゐるが、其の一層又一層、高樓にのぼるが如く、或は一皮又一皮、筍皮を剝いで中心に肉迫するが如き句法も妙は妙だが、これを孫子の正筆奇筆縱横の兵法的文章法に比するならば、稍〻單純にして變化躍動の妙に缺くる遜色があるやうに思ふ。

孫子の文章法を自家藥籠のものとした名文章家に昔は賴山陽があり、明治以後には德富蘇峰があり、海軍の秋山眞之參謀があつた。

昔は、賴山陽の著した「古文典刑」は古漢文中の名文章を選拔して評釋を加へた漢文の文章讀本ともいふ可きものだが、孫子からは軍形篇一篇を採つてこれに文章上の評論を加へてゐる。

然るに、今日漢文教科書を編纂する現代の專門漢文學者等は何故孫子の名文章孫子の妙言佳句をもつと顧みないであらうか。僅かに練習問題の中に、若干これを挿入してゐるにすぎぬのは、年來著者の不思議に堪へざる所である。

まして時は今、前古無比の雄大なる作戰構想の下に、大東亞戰爭を戰つてたたかひ拔き、勝ち拔かねばならぬ時代ではないか。我等は孫子を讀んで讀み拔かねばならぬと思ふ。

孫子兵法の文章法

正兵を以て合ひ、奇兵を爲して（或は奇兵を以てともいふ）勝つは、孫子の兵法。正筆奇筆、縱横にして、人の心を捕捉せざればやまぬは孫子の文章法。字句の雄健にして簡潔精練なるは、名將の訓練に成る精兵の如く、これを率ゐて、正筆奇筆の相生展開は、循環の端なきに似る。紛々紜々として鬪ひ亂れて、亂る可らず、さながら名將の指揮する實戰場を見るの概あつて人を感動せしめる。

思ふに、支那春秋戰國の諸子百家中、正々堂々の論陣を張つて、正筆を用ふるに最も巧みなるものは、法術韓非の文である。奇想天外人の意表に出でて、奇筆を用ふるに最も妙を得たるものは、鯤化して鵬となる寓話莊子の文である。これを兼ねて、正奇縱横の相生展開を示すものは、兵法孫子の文章法是れである。

孫子に在つて兵法は其の文章の如く、文章は其の兵法の如く、渾然一體、一にして二ならず、其の最も典型的なるを兵勢第五、虛實第六の二篇とする。兵勢篇は奇正の理を說く。しかして此の正筆奇筆縱横の文章法に更に滋味妙味を添へ、迫力彈力を加へる三手法を孫子の文章は巧みに用ひて、生氣の躍動するを見る。

其の一つは、しばしば迫力彈力ある逆說的警句を點じて、人の意表に出づる。

其の二は、巧妙なる譬喩によつて人をよく眞に首肯せしめる。

其の三は、數字的句法を用ひて、理解を的確に具體的ならしめ、容易に要約的ならしめる。

これを筆者は名づけて、孫子の文章法における三手法といふ。文の正筆奇筆

といふは軍の正兵奇兵である。

文の三手法といふは、これをたとふれば、兵の手にする武器と其の使用法である。

斯くて筆者の所見によれば、攻守の理を説く軍形第四篇は逆説的警句の手法を以てして、十三篇中、最も迫力彈力を有する名文章である。蓋し攻守・奇正・虛實の三は、孫子兵法の三大理法。而してこれを説くにおいて、孫子の文章も亦自ら生彩を放つ。

故に曰く。十三篇中、文の最も妙をきはむるものは軍形第四、兵勢第五、虛實第六の三篇。

日本海海戰第一報の文章法

凡そ兵を用ふるは正兵をもつて合ひ、奇兵を爲して勝つべく、文を作るは、正筆奇筆縱横にしてはじめて能く人の心を捕捉することが出來る。是れ兵法をもつて文を作るのコツとするもので名づけて、兵法的文章法と云ふ。

今其の最も簡單にして且つ分り易い一例をあげるならば、かの五月二十七日、日本海々戰の第一報に、――敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動、之を撃滅せんとす。――の第一句は正筆にして、――本日天氣晴朗なれども波高し、――の第二句が奇筆であつて、斯くの如く、正筆奇筆、兼ね具はるところに、此の文章の名文たる所以が存する。

第一句のみに終るならば、何の奇もなき平板なる敍述にすぎぬ。現にここま

では、他の參謀の執筆にかかるもので、名文家秋山參謀に之を示したる所、一寸待てといつて、秋山參謀が自ら筆を執つて附け加へたのが此の第二句であるといふ。まことに此の第二句が人の豫期せざる所で全く意表に出てゐる。これが讀者の心を打つて痛く感動せしめるのである。しかも一見した所では、單なる文飾にすぎぬかの如く見えながら、仔細に吟味するならば、――紙背に徹する底の眼光を以て讀むならば、――否なさうでなくとも、これを受信した軍事專門家の眼には、――此の第二句があつてこそ、第一句の末尾に示されたる主觀的な擊滅意圖の客觀的な實現可能性の存在を讀みとることの出來る極めて必須的にして適切なる文字であつた、といふのは、第一に、天氣晴朗なるは、此日濃霧深からずして、敵艦隊を霧中に見失ふ恐れなきを傳へ、第二に、波浪高きは、双方の乾舷の差と射擊命中率の相違とからして、日本側に有利の條件たる事情があつたからである。

全く人の意表に出づる奇筆にして、しかも正筆末尾の擊滅意圖と呼應しながら、擊滅の客觀的なる實現可能性を巧妙に敍述し得たるところ、さながら孫子の所謂正を以て合ひ、奇を爲して勝つ兵法の概があるではないか。思ふに秋山參謀は斯かる文章のコツを大いに孫子兵法の文章法から學ばなかつたか。此の私の推定を裏書きする資料を次に擧げやう。

秋山參謀名文の祕訣を語る

兵家にして名文章を殘したるもの、支那に孫子があり、日本に秋山がある。

秋山とは東郷大將の作戰主任參謀として活躍した中佐秋山眞之の事。彼れの手になつた「本日天氣晴朗なれども波高し」の日本海々戰の第一報。驅逐艦の接戰を敍した「舷々相摩す」の名文句。戰鬪詳報に、「夕陽西にうすづく頃、」と波上の夕日を點出した詩的描寫。「百發百中の砲一門、よく百發一中の砲百門に對抗するの理」を云々の數字的名文句を含む聯合艦隊解散訓示等の名文章は普く人の知る所である。

「貴下は斯かる名文章を如何にして作り出し得たる乎、願くば、後學のため其祕訣を敎示せられ度い。」との山本英輔、後ちの大將の問に、彼は答へて、「いや、祕訣とて別に無いが、唯自分は書物を讀んで、會心の名文章に接する毎に必ずそれを拔萃しておいて、それらを幾度も繰返へし朗讀するのを、平生の習慣としてゐるだけだ。」と彼れの祕訣を語つたことが、彼れの傳記に記されてゐたが、筆者は此頃たまたま、文豪賴山陽が其門人の村瀨藤城に答へた名文の祕訣が、これと全く符節を合するが如きを見て、大いに感ぜざるを得なかつた。

山陽の祕訣に曰く。「文の喜ぶべきものに逢へば、抄出して、一本となし、之を座右に置き、朝夕暗誦し、其の會心を取り、必ずしも暗誦せず、暗誦すれば則ち愈々妙なり。斯くの如きもの久しうして、文思おのづから湧出す。」云々といふのである。

文章の天才山陽にして、秋山參謀にして、共に斯くの如き用意があつたのである。

といへば、讀者或は、そんな事なら誰れでもわかつてゐる、といふであらう。

然り。多くの祕訣なるものが聞いて見れば、なんのこれ位のことかと思はれ勝ちの如く、これも平凡なことにちがひない。多かれ少かれ、何人でも少年乃至青年時代に賴山陽や秋山參謀の祕訣を自ら經驗しなかつたものはなからう。筆者の如きも、たしかに經驗がある。青少年時代にいくつもの文章を殆ど暗誦してゐたことを想起することが出來る。

「外史氏曰く、予屢〻攝播の間に往來し、所謂櫻井驛なるものをとひてこれを山崎路に得たり。」云々の楠氏論の如き、その一部を今でもなほ覺えてゐるほどである。

だが、玆に重要なことは、百人中、九十九人迄は否な千人中九百九十九人までは、みんな此の習慣を少年時代で、精々のところ、青年時代までで止めてしまふのに反し、賴山陽や秋山の如き天才のみが、壯年になつても、老年になつても、生涯これをつづけ通すといふ事である。

さて、秋山參謀がどんな文章を愛誦してゐたか。傳記作者がそれを調べて記してゐないのは、遺憾だが孫子の文章などは、其の最も愛誦してゐたものの、たしかに一つであつたに違ひないと考へられる。

彼れの手法は筆者の所謂正筆奇筆を併せ用ひて、正奇縱橫の妙を見る。是れ孫子の兵法的文章法に外ならぬではないか。

第二に、「百發百中の砲一門、能く百發一中の砲百門に對抗する、」云々の句法は明かに、孫子の所謂專一分十の數字的句法に學んだものと考へられる等々。

是れ筆者が彼れの文章を特に孫子兵法の名文章と並び稱する所以である。

孫子兵法の逆説

兵家は由來、人の意表に出でることをたつとぶせいか、兵書には逆説的警句を用ふるものがすくなくない。

日本語に今日、平生我々の使用する「出し抜く」、「出しぬけに、」などの言葉も元來のおこりは、「いだし抜く」といふので、兵術的に意表に出て、人を制する意味の言葉であつたらうと筆者は思ふ。此の兵法の要求からして、兵法を論ずる兵家が好んで人の意表に出る逆説的な警句を多く使用するのは、けだしまた故ある哉で、自然古兵法を讀まんと欲するものは、かかる逆説の眞に意味するところを正しく讀み取るの解釋力と雅量とでもいふか、はたまた一種のユーモアとでもいふか、兎に角字句の表面にのみ拘泥せずして、綽々たる餘裕をもつて、其の眞意を汲み取るの心がけがなければならぬと思ふ。

若し字句の表面的字義に拘泥するならば、つひにその眞の意味を領得することが出來ないであらう。それと反對に、人若しこれをよく理解し得るならば、逆説的字句の力は、印象深く讀者の腦裡にいつまでも消えざる感銘を刻印してやまぬであらう。孫子文章の妙味の一半はたしかに彼れの巧みなる逆説を驅使するの力によるものと思ふ。

世人は戰ひ勝つて天下これを善しといふならば、大いにもつて滿足とし、百戰百勝はまさに滿點と思ふであらう。

然るに孫子は曰ふ。戰ひ勝つて而して天下善しと云ふは、善の善なるものに非ず、百戰百勝は善の善なるものに非ず、と喝破するのである。古の所謂善く戰ふ者は勝ち易きに勝つ也と曰ふ。勝ち難きに勝つのではなくて、勝ち易きに勝つのが、善く戰ふ者だといふから、常識と逆であらう。善く戰ふ者の勝つや、

俗見は正に智名あり勇功あるべしとするであらう。然るに孫子は曰く、善く戰ふ者の勝つや智名なく勇功無し。と斷ずるのである。

敵の來らざるを恃み、敵の攻めざるを恃む。といふは普通には、當然至極のことであらう。然るに、孫子は用兵の法は、敵の來らざるを恃むことなく、吾が以て之を待つあるを恃み、敵の攻めざるを恃むなく、吾が攻む可らざる所有るを恃むなりといふのである。

序に、これは孫子ではないが――家康の遺訓に、勝つことばかり知りて負くることを知らざれば、害その身に至るの句の如きも、半ば逆說と見ることが出來やう。若し夫れ、日本の古諺に、「負けるが勝ち」といふ句に至つては、逆說も逆說、凡そ兵法上、これにすぎたる、逆說はあるまいと思ふ。これは正に兵法の全き逆だが、苦し限られたる條件と限度と意味とにおいて見るならば、此の逆說句にも半面の眞理がないではなからう。

逆に出る逆說。奇襲の奇句・警句。

奇句・警句――兵法的句法。

孫子兵法の比喩

孫子の文章を一言にして評するならば、簡にして約とでもいふべきか。きびきびとして、よく引きしまつた文章だが、しかも其の間、縱横に逆說的警句と巧妙なる比喩とを點綴して、思ふままに、人を驚かし且つうなづかしめて行くところ、其の手腕の凡ならざるに感ぜざるを得ぬ。其の兵を用ふるの法をもつて、讀者の意表に出づる孫子が逆說的警句の手法に就いては、すでにこれを孫子兵法の逆說と題して述べたから、ここには其の比喩のうち、特に興味あるものの若干に就いて述べて見やうと思ふ。

其の一つは、積水の比喩とでもいふべきか。勝つ者の戰ひ積水を千仞の谿に決するが如きものは形なり。といふ。形とは軍形である。はちきれるばかりの我れの實をもつて、敵の虛に乘ずる所である。

其の二つは、圓石の比喩とでも稱すべきか。善く人を戰はすの勢、圓石を千仞の山より轉ずるが如きは勢ひ也。といふ。これは說明するまでもなからう。

其の三は、風の如く、林の如く、火の如く、山の如く、陰の如く、雷の震ふが如し。六如の比喩とでもいふべきか。

兵は詐をもつて立ち、利をもつて動き、分合をもつて變をなす者なり。其疾きこと風の如く、其徐かなること林の如く、侵略すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷の震ふが如し。といふ。すなはち軍爭の法である。

武田信玄は日本の戰國武將中、最も孫子の私淑者であり、その陣營には、此の六如の句より四句を採りこれを大書した旗を立てなびかせてゐたと傳へられる。

其の四は率然（リツゼン）の比喩、又は常山（ジヤウザン）の蛇の比喩である。善く兵を用ふるものは、譬へば率然の如し。率然は常山の蛇なり。其の首を擊てば則ち尾至り、その尾を擊てば則ち首至り、其の中を擊てば則ち首尾俱に至る。といふ。所謂長蛇の陣形といふもの、或は海軍で單縱陣と呼はれる陣形の意（ロ：コ）はこれである。

五月二十七日の海戰における當初の對勢が日本艦隊の單縱陣長蛇の陣形なりしに對し、露艦隊のそれが二列縱陣すなはち衡蛇（コウダ）の陣形なりしは、人のよく知る所であらう。

其の五つは、處女脫兎の比喩とでもいふべきか。始は處女の如く、敵人戸を開く、後ちには脫兎の如く、敵拒ぐ能はず、ここに戸を開くとは關所の戸を開くこと。始は敵に弱きを示して油斷させ、其の間隙に乘じて、すかさず脫兎のやうな敏速さで奇襲すべし、といふので、これも前の常山の蛇の比喩に劣らず有名な句になつてゐるが、筆者按ずるに、脫兎の語は、孫子の如く、奇襲の勢を形容するよりは、寧ろ脫走乃至敗走の勢にたとへる方がより妥當適切ではあるまいか。例へば、關ヶ原に敗るるや、一目散に大阪に出で、それより海上一路、鹿兒島までのがれ歸つた島津義弘。モスコーを猛火に燒かれ遣ふはふの態で巴里まで敗走したナポレオン。これを東西脫兎圖の二幅對と筆者は思ふが如何に。これは少々脫線したかも知れぬ。此の邊にてペンを擱くことにしやう。

「動くこと雷の震ふが如し」は一本に、雷霆の如しに作る。因みに「常山紀談」は徂徠學系統の兵學者常山湯淺元禎の著作にかかる兵法隨筆ともいふべき好著として今日なほ廣く愛讀さるるもの。其の常山の題名は、常山の號から來たり、常山の號は、孫子に所謂常山の蛇から取つたものにちがひないと思ふ。成程頭から讀んでも、尻から讀んでも、よくわかる面白い書物である。

孫子兵法の文章と數字

第一篇を始計篇とし、五事七計を以て始める孫子兵法十三篇は、先づ五事をはじめに、五法・五危・五火の變、五間(カン)七計、九變、九地、等々。一に曰く何、二に曰く何、三に曰く何々と、計數的に敍したる句が隨處にあらはれて、敍述整然、それが讀者の把握を容易的確ならしめると共に、非常に文章を力强く引きしめるに役立つてゐると思ふ。

次に、――未だ戰はずして、廟算勝つ者は算を得る多き也。未だ戰はずして廟算勝たざるものは算を得る少き也。算多きは勝ち算少きは勝たず。然るを況んや、算なきにおいてをや、とて多算少算無算と計數的に序列比較して論ずるのも面白い。用兵の法を計數的に示しては、――十なれば之を圍み、五なれば、之を攻め、倍なれば之を分ち、敵すれば則ち之と戰ひ、少ければ則ち之をのがれ、しからざれば則ち能く之を避く。云々といふ。

我れの兵數を敵と比較して、我れ彼れに十倍すれば、五倍なれば、二倍なれば、相匹敵する兵數なれば、我れの方が少ければ、我れの力、彼れに及ばざれば、斯く斯くの手段に出でるといふのである。

十倍なれば圍み、五倍なれば攻めるなどいふ數量關係は、今日では、問題になるまいが、文章としてはこれによつて生彩あるを蔽へぬ。

また進軍の里程と輜重等との關係を計數的に敍したるものに、――道を倍し行を兼ね、百里にして、利を爭へば、則ち三將軍を擒にせらる。勁者先だち、疲者後くる。其の法十の一にして至る。五十里にして利を爭へば、則ち上將軍を蹶かす。其の法半は至る。三十里にして利を爭へば、則ち三分の二至る。此の故に輜重なければ則ち亡ぶ。云々。――百里、五十里、三十里、十分の一、

半分、三分の二と、なかなか數字的で成程と思はせるものがあるではないか。若し夫れ――人に形して我れに形なくんば、則ち我れは專らにして敵は分る。我れは專らにして一となり、敵は分れて十とならば、是れ十を以て其一を攻むる也。――に至つては、彼の秋山參謀が――百發百中の一門、百發一中の敵砲百門によく對抗し得るを知らば、云々の名文と其軌を一にするを見る。

さらに、概數的な數字を縱横に驅使して、孫子が最も文章上の妙味を味はしめるものには、――凡そ兵を用ふるの法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里糧を饋らば、內外の費、賓客の用、膠漆の材、車甲の奉、日に千金を費して、然るのち十萬の師擧ぐ。――といひまた、――凡そ師十萬を興し、千里に出征せば、百姓の費、公家の奉、日に千金を費し、內外騷動し、道路に怠り、事を操るを得ざるもの、七十萬家、相守る數年、以て一日の勝ちを爭ふ。而して爵祿百金を惜しみ、敵の情を知らざるものは、不仁の至なり。人の將にあらざる也。主の佐にあらざる也、勝の主にあらざる也、といふの類がある。

百發百中と百發一中

百發百中の砲一門は能く百發一中の砲百門に匹敵す。云々とは、日本海々戰の作戰主任參謀秋山中佐の打出した名文句として、何人も知る所。これが當時、朝鮮鎭海灣附近に艦隊を集合して、射擊の白熱的猛訓練を重ねた結果、大戰當日、遺憾なく、其の效果を發揮した實戰上の體驗より打出された所なるは言を俟たぬが、字句上の出所は、次の二つの古語にあるやうに思はれる。

其の一は、孫子兵法に所謂專一分十の原則を論ずるの語で、——我れは專らにして一となり、敵は分れて十とならば、是れ我れの十を以て、敵の一を擊つもの也。云々の句である。

其の二は、卷由基の善射を敍した司馬遷の「史記」の語で、——楚に卷由基といふ者有り、善く射る者なり。柳葉を去ること百步にして之を射る。百たび發して百たび之に中つ。——とある所謂百發百中の語が是れであらう。

此の二つの語句を巧みに應用活用したもののやうに思ふ。

卷由基の百發百中は弓を射るのだが、それを大砲に代へ專一分十は一と十だが、それを一と百に代へて。

序に、此の秋山參謀が水雷驅逐艦の戰鬪を報じて有名なる句に、舷々相摩す。云々の語があるが、これは思ふに「戰國策」に、人や車の雜沓する樣を敍して、——臨淄の途、車轂擊ち、人肩摩す。云々——とある所謂肩摩轂擊の語。これは陸上の事だが、それを海上に應用活用した所が面白いともおもふ。人の肩と肩相すれ合ふ——すなはち、人の肩を舷に代へて。

孫子の文章と必の字

孫子の文章には、なほ今一つの特色が顯著である。必の字を毎篇必ず蠍の單眼の如く點出して文章に生彩活力あらしめてゐることも、他の六兵書中に其比を見ない孫子獨特の手法といつてよからう。

孫子十三篇の文章はこれを譬へていふならば、所謂率然たる常山の長蛇を描いたもので、其の畫龍點睛すなはち常山長蛇の瞳は、十三篇の隨所に爛々と輝く必の字が是れだと思ふ。

○孫子曰く、吾が計を聽いて之を用ふれば、必ず勝たむ。之に留まらむ。吾が計を聽いて之を用ひざれば、必ず敗れむ。之を去らむ。（始計第一）

○孫子曰く、彼を知り己を知れば百戰殆からず、彼を知らずして己を知れば、一たびは勝ち一たびは負く。彼を知らず、己を知らざれば戰ふ毎に必ず敗る。（謀攻第三）

○孫子曰く、名將の必勝を措く所、すでに敗るるに勝つ者也。（軍形第四）

○孫子曰く、善く敵を動かす者は之に形して、敵必ず之に從ふ。之を予（與）へて、敵必ず之を取る。（兵勢第五）

○孫子曰く、攻めて必ず取る者は、其の守らざる所を攻むればなり。守りて必ず固きものは、其の攻めざる所を守れば也。（虛實第六）

○孫子曰く、圍む師は必ず闕げ。（軍爭第七）

○孫子曰く、軍を覆へし、將を殺すこと、必ず五危をもつてす。（九變第八）

○孫子曰く、夫れただ慮なくして、敵を易る者は必ず人に擒にせらる。（行軍第九）

○孫子曰く、戰ひの道、必ず勝たば、主戰ふ勿れと曰ふとも、必ず戰ひて可な

り。戰ひの道、勝たざれば主必ず戰へと曰ふとも戰ふなくして可なり。（地形第十）

○孫子曰く、敵人開闔せば、必ずすみやかに之に入れ。（九地第十一）

○孫子曰く、火攻を行ふには、必ず因有り。煙火は必ず素より之を行ふ。

○孫子曰く、五間（ゴカン）の事、主必ずこれを知る。（用間第十三）

等々。故に筆者曰く、必の字は孫子十三篇の文章上における常山長蛇の畫龍點睛なりと。

素行・白石・徂徠の孫子文章短評

古來孫子の註釋書は積んで山をなすが、いづれも兵家としての孫子を論ずるのみで、孫子の名文章に就いて說いたものは極めて稀れである。のみならず其の稀れに孫子の文章を論ずるものが、いづれもまた僅に片言隻語を費してゐるにすぎぬのは從來の孫子研究者に著者のすこぶる遺憾とするところである。

素行は曰く、

始計第一篇、用間第十三篇、首尾有り、通篇自ら率然の勢（所謂常山の蛇の勢）有り、文章の奇、求めずして自ら無窮の妙あり、讀者忽にすべからず。

と總評を下してゐるのであるが、きはめて簡單にして且つ平凡の論たるにすぎ

ぬ。

次に徂徠は曰く、

總じて軍書の中にて孫子ほど文の奇妙なる書なし、歴代の文人、是れを稱美せるも、孫子が文章をたしなみて書きたるには非ず。その道理の妙所を得たる故、中にみちて外にあらはるる道理にて、自然と文章他書に勝れたるなり。

といふのであるが、「總じて學問の道は文章の外これなく候」(徂徠答問書下卷)と、文章に重きをおき、文章をやかましく論ずる徂徠だから、もつと孫子の文章に就いて大いに論じてゐて然るべく思はれるにも拘らず、たつたこれだけである。大いに物足りなさを感ぜざるを得ぬ次第だが、「中に滿ちて外にあらはるる道理にて、自然と他書にすぐれたので、別にたしなみて書いたのではない」といふのだから、徂徠から孫子の文章法に就いての研究など求めるのは、最初から求めるのが無理ともいへやう。

右の如き素行・徂徠の論に比して、我々に寧ろ妙味をおぼえしめるのは白石だと著者は思ふ。

元來孫武子事は孔子よりは前輩のつもりに司馬遷の史記に見え候。文章もすぐれ候。これは十三篇ながら古文の手本にのこらず選び入れられ候事勿論に候。

別言すれば、名文章で、十三篇悉く古漢文の模範だといふのである。

そして、此の白石の孫子文章觀を踏襲して、「古文典刑」と題する文章讀本を著し、孫子より「軍形篇」の文章を、尉繚子(ウツリョウシ)より、「制談篇」の文章を選び拔いて評論を加へたのが賴山陽であつた。

山陽の史筆が白石の「讀史餘論」に負ふ所の多きは山陽自身自ら告白してゐるところが、今此の點でも亦あきらかに白石に學んでゐるものの如く考へられる。

孫子と文豪頼山陽

徳川時代における兵家孫子の復興的研究中萬綠叢中、紅一點の異色あるものは、文豪頼山陽の「古文典刑」中に、孫子の文章を評論し、大いに賞揚してゐるのが是れであらう。

「古文典刑」は有名なる山陽の寧ろ最も有名ならざる著作に屬するのが、其名の如く、古漢文中より凡そ二十數家の名文章を選集して、これに文章上の批評を加へた、いはば一種の文章讀本で上中下の三卷より成る。（典刑の刑の字は刑法の刑にあらずして、型式の型の意であり。すなはち現代の用語でいふ典型の事である。）

其の上卷に孫子軍形篇の一篇を、次いで尉繚子（ウツリョウシ）制談の一篇を選び取つて、これに文章上の評論を加へてゐるのである。

山陽は十八歳以前すでに、孫子を讀んでゐる。それは孫子に就いて、

十三の書、前無く後無く、

其の尤も妙を見る、形勢の二篇。

といふ詩がある。形勢の二篇とはいふまでもなく、軍形第四篇、兵勢第五篇の事。これが山陽十八歳の作にして、「古文典刑」はそれより十年の後ち、二十八歳の折りの選述だが、更に後年には、「日本政記」の起稿にあたり、其の參考書の一つとして、武經七書の送付を廣島なる母に求めてゐる手紙があり、その如何に終始、孫子を讀んだかがわかる。山陽の子孫の此頃語る所によれば、山陽には孫子の兵法に就いての著述の計畫もあつたが、その方はつひに成稿を見るに至らずしてやんだといはれる。

現代の文士で孫子を讀み、孫子の文章法を活用して功果をあげてゐることの

顯著なるは、老蘇峯に若くはあるまい。

蘇峯は賴山陽の擴大再生産とも評さるべき老文豪。此の人に、山陽の如く孫子の文章についての評論があるかどうかは、未だこれをつまびらかにせぬが、蘇峯が山陽の如く孫子を文章として大いに讀まれてゐることだけは寸毫も疑を容れぬ。

本文筆者の如きは、もとより文士ではないから、孫子を讀むのも、兵法として讀むのが固より主だが、しかも同時に文章として讀むことにも多大の感興なきを得ない理由が存する。筆者は曾つて、經濟學部に學びいはゆる法學者流の論理的正々堂々の一點張りで、奇筆を併せ用ふることを解しない無味乾燥の文章に慊らざることすでに久しきものがあり、しかも他面、漢文を讀むのが、昔から好きで、殊に先秦文學の古漢文を渉獵玩味するには今なほ飽く所を知らぬものだからである。　一

すなはち、筆者の孫子を讀むは、兵法として七分、文章として三分、――兵七文三の讀書法による。是れ筆者が兵法の中に文章法を見出し、文章法の中に兵法の活用を見、孫子の研究にも、兵法と文章法と相互に映發して、所謂綠、紅に映ずるの風趣あらしめたいと期してゐる所以である。

孫子軍形篇に對する山陽の文章評論

軍形第四篇の冒頭に先づ總評を下して、山陽は、孫子の文章を以て、虛を用ふるに妙を得た莊子の文章と實を用ふるに妙を得た左傳の文章と、此の兩者の長所を兼ね備へた名文章だと賞揚してゐる。

莊妙ニ於用レ虛、左妙ニ於用レ實、兼之者孫子之論兵也。

（莊は虛を用ふるに妙。左は實を用ふるに妙。之を兼ぬる者は、孫子の兵を論ずる也。）

虛實兼備と兵法的用語をもつて評したるところが面白い。次に、此の篇に勝の字を用ふること二十五遍、句法二十五變の妙を指摘して、

飜ニ弄一勝字一、成レ文凡二十五勝字、句法二十五變、愈出愈奇、千古妙文、學士家罕ニ見及者一。

（一勝字を飜弄して、文を成す二十五勝字。句法二十五變、愈〻出でて愈〻奇なり。千古の妙文、學士家及ぶ者まれに見る。）

と評し、「古の所謂善く戰ふ者は勝ち易きに勝つ者也。故に善く戰ふ者の勝つや、智名無く、勇功なし。」云々

の文章に至り、

熟ニ讀此一、可レ悟ニ虛字錯綜之法一。

（此れを熟讀して、虛字錯綜の法を悟る可し。）

と論じて、最後の結句に及び、

形字是一篇題目、却於ニ結處一點ニ出之一奇格。

（形の字は是れ一篇の題目、却つて結處において之を點出するは奇格なり。）

と結んでゐる。軍形篇だから形の字は一篇の題目なるに拘らず、却つて最後の

結末のところに及んではじめて、「積水を千仞の谿に決するが若き者は形也」とて、形の字を出して來たのは奇格だといふのである。

白石の寸評に比すれば、はるかに發展したものといへるが、しかも是れだけであつて、あへてくはしい孫子文章法の研究とは未だ稱し難いと思ふ。

二、孫子兵法の精神

―孫子兵法の考へ方―

孫子兵法の基本論理

竹を割くの法は、これを縱に竹のもく目に從へば、所謂破竹の勢を成して割ける。牛を解くのコツは、筋肉と骨の筋道に沿うて、刀を使へば、所謂肯綮にあたつて、やすやすと解ける。奇正縱横にして、且つ逆說警句に滿ちた孫子の兵法を解するの法も亦、かくの如し。

孫子の思考樣式――孫子の物の見方考方――孫子の論理に從ひて、これを解すれば、正確且つ容易に孫子の眞意を把握することが出來る。これを割き易きに從ひて割き、これを解き易きに從ひてとくのが、兵法の要領である。

字句の詮議をもつて足れりとしない。

孫子を註解し例解するの書、淺學なる筆者の一讀したるものだけでも數種を數へるが、一つとして、此の點に考へ及んでゐるものを見ぬ。

かの「孫子國字解」の徂徠は、行軍第九篇に、「生を視て高きに處る」の句を註解するに當り、その註解法の抱負を披瀝して、

總じて古書は字義を第一とす。生の字は土に從ひ山に從ふ文字にて、中は草なり。草の土より生じたる貌なり。故に字の本義は草木の土より生ずることを生といひて、それより轉じ用ひて、其外の生類の生るるにもまた、生活の義にも用ふることなり。古書の字義に暗くして、古來の註みなあやまてり。

と意氣當るべからざる概がある。字句の註解法はさもありなむ。しかもそれに止まり、更に論究を進めて、孫子の論理を通論しようとは、少しも試みてゐない。

かの徂徠にしてなほ然り。其他の註解者流においてをやである。

紛々紜々として鬪ひ亂れて亂るべからず、渾々混々として形、圓にして敗るべからざるは、名將の指揮する實戰の狀況だが、これが理解にはただ、各個の精兵乃至其の一小部隊を點檢するのみにては足らず、必ずや作戰用兵の法そのものを吟味檢討する所がなくてはならぬ。しかして字句の註解法はこれをたとふれば、各個の精兵乃至その一小部隊の點檢の如し。上つて我等は、孫子の思考樣式そのものを吟味檢討して、今それが、凡そ九つの基本的條理から成り立つてゐるのを見出す。

一に曰く、利害相雜の理。二に曰く守るは足らざればなり、攻むるは餘り有ればなりの攻守の理。三に曰く、奇正相生の理。四に曰く、虛實々虛（キョジツジツキョ）の理。五に曰く、無形至極の理。六に曰く、屈伸の理。七に曰く窮通の理。八に曰く、人和の理。九に曰く、必然の理。是れが孫子兵法の基本論理である。

○

一に利害相雜の理とは、凡そ物は利中に害あり、害中に利有り、利ありて害なきことなく、害ありて利なきことなし。故に孫子は曰く、智者の慮は必ず利害を雜（マジ）ゆ。利に(害)を雜へて、務めは信(伸)ぶ可きなり。害に(利)を雜へて患は解くべき也。又曰く、凡そ兵を用ふるの害をつくし知らざる者は、則ち、兵を用ふるの利をつくし知る能はずと。これは深刻な表現だと思ふ。

○

二に、攻守の理とは、孫子曰く、善く戰ふ者は先づ勝つべからざるを爲して以て、敵の勝つべきを待つ。勝つべからざるものは、守りなり。勝つべきものは攻めるなり。守るは足らざればなり。攻むるは餘り有ればなり。故にまた曰く、兵を用ふるの法、敵の來らざるを恃むことなくして、吾が以て待つあるを恃む。敵の攻めざるを恃むことなく、吾が攻むべからざる所あるを恃む。善く戰ふ者は不敗の地に立つて敵の敗を失はずと。然るに此の攻守をばらばらにし

て、守れば常に足らず、攻むれば常に餘り有りと解する者の如きは、利害の相雜はるを看取すること能はずして、利は是れ常に利のみ、害は是れ常に害のみとみなす者と同樣、ともに孫子の眞意を把握するに由なきものである。

○

三に、奇正相生の理とは、孫子曰く、凡そ戰は正をもつて合ひ、奇を爲して勝つ。三軍の衆、必ず敵を受けて敗るるなからしむるものは、奇正是れなり。奇正相生じて、循環の端なきが如し。孰れか能くこれを窮めんや、といふもの是れである。

○

四に、虛實々虛の理とは、虛對實、實對虛の意義と虛は實となり、實は虛となる虛實轉化の意義とを併せ意味するがために虛々實々の語に對して、筆者が新に造るところの語である。孫子曰く、兵の加ふる所、碫をもつて卵に投ずるが如きは、虛實是れ也。兵の形は實を避けて虛を擊つと。筆者の所謂虛對實である。

○

五に、無形至極の理とは、多角の極は圓に至り、有形の極は無形に至る。孫子曰く、渾々混々として形、圓にして敗るべからず。孫子曰く、兵を形するの極は形無きに至る。人に形して、而して我に形無きときは、則ち我れ專らにして敵は分る。我れに形無きときは、則ち深間も窺ふこと能はず。微なる哉、微なる哉、形なきに至る。等々と云ふもの是れである。

○

六に、屈伸の理とは、尺取蟲の屈するは、伸びんがためである。韓信は股間に屈して、後ち天下に伸びた。猫の鼠を襲はんとするや、先づ其の形を伏す。等々。故に、孫子曰く、鷙鳥の疾き毀折に至るものは節なり。善く戰ふ者は其

の節短し。或は曰く、辭卑くして備を益す者は進む也。或は曰く、始は處女の如くにして、敵人戸を開く、後ちには脱兎の如くにして、敵人拒ぐに及ばず。等々。

○

七に、窮通の理とは、凡そ物窮すれば通じ、窮鼠は猫を嚙む。等々。此の理を筆者名づけて窮通の理と稱し、其の理數を數字的に闡明すると共に、幾多の例證をあげて別に詳述するところあつたが、孫子の兵法に、人情の理、或は兵の情といつてゐる所のものは、筆者の所謂窮通の理の一部にあたる。孫子曰く、屈伸の利、人情の理、察せざるべからず。兵の情圍まるれば則ち禦ぎ、止むことを得ざれば則ち鬪ひ、逼まれば從ふ。又曰く、之を死地に陷れて而して後ち、に生く。死地には則ち戰へ。窮寇は迫るなかれ。圍む師は必ず闕げ。等々。圍む師は必ずかげとは、其の三面を圍み、一面をあけて、敵をして窮寇たらしめざるがためである。窮鼠たらしめざるがためである。

○

八に、人和の理とは、いはゆる天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかざるの理である。故に孫子が五事七計の五事は一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地云々といふ順序にて、其の一に曰く道とは、所謂人和のことをいつてゐる。又曰く、夫れ地形は兵の助けなりと。すなはち人が主にて、地形は主にあらず、戰ひの助けとなるまでのことだといふのである。兵法における天地人の關係はかくの如し。今次フランス軍敗因の一つは、この關係を顚倒して、人より寧ろマヂノ線を主にし、たのみにした所にあつた。

○

九に曰く、必然の理とは、所謂二つの可能性の反對にて、必ず然る所に立脚する。孫子は此の理を、戰ひの道、或は利に合ふ利に合はぬ、等の語をもつて

表現する。すなはち孫子は曰く、戰ひの道必ず勝たば、主戰ふ勿れと曰ふも必ず戰ひて可なり。戰ひの道勝たざれば、主必ず戰へと曰ふとも戰ふなくして可なり。兵、利に合ひて動き、利に合はずしてやむ。等々。孫子が五事七計により成算を重んじ、又必の字をよく用ふるも、此の理に基く。孫子曰く、夫れ未だ戰はずして廟算するに、勝つ者は算を得ること多し。未だ戰はずして廟算するに、勝たざるものは算を得ること少し。算多きものは勝ち、算少きものは勝たず、況んや、算なきにおいてをやと。又、孫子が善く戰ふ者は勝敗を勢に求めて、之を人に責めず、故に能く人を擇んで勢ひを任ぜしむ、といふも必然の理に立脚するが故に、然るを得るのである。所謂二つの可能性がこれを勢ひに求めず、專ら之を人に責めると對比すれば、おのづから其の相違する所以が判然しやう。

○

終に我等は、善く戰ふ者は勝ち易きに勝つ者なりの逆說的論理によつて、孫子を善く解する者は、解し易きに解する者也、との所論を肯定し得ると共に、利害相離の理に從つて、孫子の短的弱點をつくし知らざる者は則ち、孫子の長的强點をつくし知る能はざる也と恐るる所なく論評し得るを喜ぶ。そして孫子論理の妙味に深く感ずるものである。

必死は窮通す。
必然は開展す。
必生は必敗する所以。
必死は必勝する所以。

孫子十三篇

孫子十三篇。第一に始計、第二に作戰、第三に謀攻、第四に軍形、第五に兵勢、第六に虛實、第七に軍事、第八に九變、第九に行軍、第十に地形、第十一に九地、第十二に火攻、第十三に用間。間（カン）とは間者間諜の事。すなはち五間（五種の間者）をもつて、情勢を探知し、それに基いて、始計篇の五事七計に行はれる次第なれば、始計第一にはじまつて、用間第十三に終る。まことによく首尾相應ずること所謂常山の蛇の如くであつて、軍形第四は攻守の關係を論じ、兵務第五は奇正の變を說く。唯九變第八の一篇に若干の脫落と混入と思はれる部分のあるを別にしては、ほぼ完全に原形のままに傳はつたものと認むべく、眞に結構雄大、序列整然たる一大文章である。

近世プロシヤの兵家クラウゼヴィッツの「戰爭論」全八篇の構成序列が、孫子の始計第一と作戰第二とに該當する作戰計畫論を最初におかず、却つて最後の第八篇におくは、クラウゼヴィッツの科學的研究法たる、具體性よりして單純範疇に向下し、そしてそれよりまた、もとの具體へ向上して、かへり行く研究方法の結果なるが、一般の理解には、孫子の序列の方が、實際に卽して、わかりやすからうと思はれる。一は戰爭の近代的・歷史的・科學的研究。一は吳王のために上書したものと思はれる古代兵法書。兩者その敍述樣式を異にする所以を見るべきである。

但し、孫子の作戰第二篇なるものは、其の篇中にいふ所、おもに、戰費問題にして、しかして戰費の關係より、兵は勝ちを貴ぶ久しきを貴ばずといひ、又兵は拙速を聞く、未だ巧みなるの久しきを觀ざる也といつて、所謂卽戰卽決主義に及び、久しく兵を曝らすの不利を戒めるのを以て、其の內容の眼目とする

ものだから、今日の作戰計畫篇と文字通に同一視するのは、ちとどうかと思ふ。

次に謀攻第三篇が、一見、純戰略論なるかに見えて、實は戰略論といふよりは、寧ろ外交論の領域に屬し、今日から見れば、これを純兵法書中におくは、稍々當を失するであらう。他の六兵書と趣を異にして、孫子は特に、純兵法論に終始して、政治論をまじへぬのをその一大特色とされてゐる兵書なるが故に一言する次第である。

戰國時代の「韓非子」によれば、毎戸孫子の兵書を藏せざるは無しとあるから、もとより毎戸といふは文字通に解すべきではないとしても、其の當時如何に廣く普く讀まれたかは、これを察するに難しとしない。

孫子兵法死活の一句

凡そ攻守の形守れば餘り有り。攻むれば足らず、すなはち守れば實となり、攻むれば虛となれど、守るは既に足らざる所あれば也。攻むるはすでに餘りある所あればなり。是れ攻守の關係である。

若し反對に、守れば常に足らず、攻むれば常に餘り有りとするならば、攻めて攻められ、攻めて敗らるる例は戰史の上にこれあらざる筈である。然るに、攻勢に極限あり、勝利の進行に限度あり、一度び其の極限點を超ゆるや、俄然攻勢は守勢に、勝利は敗北に逆轉して、攻守勝敗其の地位を顚倒したる例は、戰史にすくなくない。

凡そ攻守の關係も亦、守中攻あり、攻中守有りて、守れば實となる。乃ち攻

むる也。攻むれば虛となる。乃ち守る也。かくて守は攻となり、攻は守となる。これ攻守の轉化である。すなはち守るだけでは固より足らず、やがて攻めざれば勝つことは出來ぬ。唯守るのみにて攻めざれば、その守りは足らずといふべく、攻めて以つて、守るならば、まさに餘り有りといひ得るであらう。

孫子の軍形第四の篇は、此の攻守の形を論ずる重要篇だが、孫子曰く、昔のよく戰ふ者は先づ勝つべからざるを爲し、以て敵の勝つべきを待つ。勝つべからざるは己れに在り。勝つべきは敵に在り。云々。勝つべからざる者は守る也。勝つべきものは攻むる也。守則不足。攻則有餘。云々。——

先づ勝つべからざるを爲しとは、先づ敵の我れに勝つことのできぬやうにすの謂ひにて、こちらが實となり、不敗の地に立つのである。以て敵の勝つべきを待つとは、こちらが敵に勝つことのできる形勢を待つて攻むるの謂ひにて敵が虛となるを待つて攻むる。そして、いはゆる敵の敗を失はずといふのである。敵の我れに勝つことのできぬ所以の形は、我れに在る。實は我れに在る。こちらが、敵に勝つことのできる所以の形は敵の側に在る。虛は敵の側に在る。我れの實を以て乘ずべき敵の虛を待つて、これに乘じ、以て必ず敵を敗る。敵の敗を失はず、といふのである。

敵の我れに勝つべからざるもの——我れが實となり、不敗の地に立つ所以のものは守るのである守ることである。守るからである。我れのすなはち、こちらが、敵に勝つべきもの、——敵が虛となり、敵の敗を失はず、敵の虛に乘じて、機を逸せず、敵を必ず敗る所以のものは、攻むることである。攻むるからである。といふのである。

されば、此の守るたるや、唯單に守るがための守るではなく、我れを實にするが爲めの守るであり、以て敵の虛を待つて、これに乘じて攻むるがための守るであり、此の攻むるたるや唯單に、攻むるがための攻むるではなくて、我れ

の實を以て、敵の虛を待つて、これに乘じて敵の敗を失はざるがための攻むるである。すなはち、攻をはなれたる守でなく、守をはなれたる攻ではない。故に孫子の論ずる所、守るだけの守、攻むるだけの攻に非ること明白である。而して後ちに、守則不足、攻則有餘の句である。

これを何と讀み何と解すべきか。

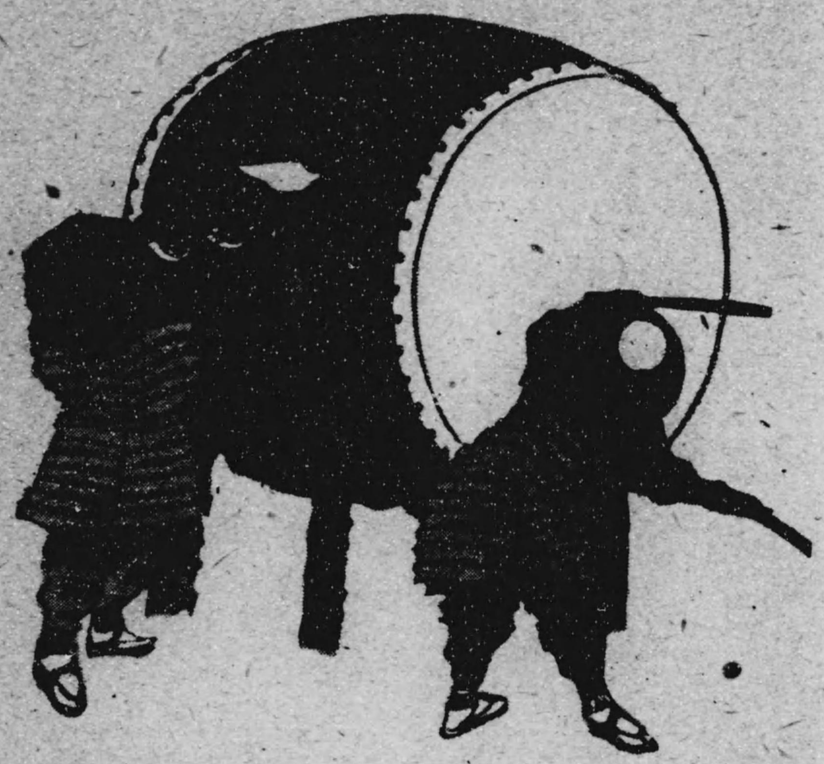
從來、武人の多くは、守れば則ち足らず、攻むれば則ち餘り有りと訓じ、好んで、これを守れば常に足らず、攻むれば常に餘り有り、即ち、守勢は常に不利、攻勢は常に有利なりと解し、何でもかでも、常に攻めさへすれば、それが有利であるといふ風に考へるのが一般であるが、それが攻守の理に反するのみならず、孫子の眞意にも亦そはざる解釋なること、上述で明かと思ふ。

筆者と同じく、これを守るは足らざればなり、攻むるは餘り有ればなりと解するもの、古人には李衞公問對書の李靖將軍がある。

漢文の句法からいへば、多少無理かも知れぬが、此の讀み方が――此の解釋が――最も攻守の理に合致するのみならず、字句法からしても必ずしも、斯く讀みくだせないこともなからうと考へる。

しかしながら、或はこれを、守るにては則ち足らず、――守るだけでは、足らず、さらに轉じて、――攻むれば則ち餘り有り。と、讀めないこともあるまい。孫子の文章からすれば、或は此の方が孫子の意にかなふものであり、且つ孫子の考へた所も實は此の程度かも知れない。攻むれば則ち餘り有り、といつても、それは我れの實をもつて、敵の虛を待ち、敵の虛に乘じて、敵の敗を失はざれば、餘り有りの謂ひにして、何でもかでも攻めさへすれば、常に餘り有りといふとは、斷然反對である。

思ふに、攻守の關係をどう見るかは兵學の核心であり、根本問題であつて、若し通說の如く、守れば則ち常に足らず、攻むれば常に餘り有りと解するなら



北齊條，陣具と陣太鼓

ば、孫子兵法十三篇は死んでしまふ。僅かに八字ながら孫子兵法の死活を決するの文字といつて過言であるまい。

左右而見百官修飾事臣幅湊有賞者君見其功有罰者君知其罪見知不悖於前賞罰不僭於後又有不辨之患管仲非明此言於桓公也使去三子故曰管仲無度矣

孫子

軍形

昔之善戰者先爲不可勝以待敵之可勝不可勝在己可勝在敵故善戰者能爲不可勝不能使敵之必可勝故曰勝可知而不可爲不可勝者守也可勝者攻也守則不足攻則有餘善守者藏於九地之下善攻者動於九天之上故能自保而全勝也見勝不過衆人所知非善之善者也戰勝而天下曰善非善之善者也故舉秋毫不爲多力見日月不爲明目聞雷霆不爲聰耳古之所謂善戰者勝於易勝者也故善戰者之勝也無智名無勇功故其善戰勝不忒不忒者其所措勝勝已敗者也故善戰者立於不敗之地而不失敵之敗也是故勝兵先勝而後求戰敗兵先戰而後求勝善用兵者修道而保法故能爲勝敗之政兵法一曰度二曰量三曰數四曰稱五曰勝地生

守則不足攻則有餘に就いての白石の所見

守則不足、攻則有餘の句、白石も亦、李靖の如く解してゐるやうである。

「孫武兵法擇副言」に曰く。

形篇第一段、（昔の善戰者より攻則有餘に至る。）先づ爲レ不レ可レ勝、以待ニ敵之可レ勝とは我先づ自ら守りて、敵の攻むべきを待つなり。先爲レ不レ可レ勝とは、敵の我れに勝つべからざることを言ふにはあらず、我れ自ら視て以て足らずとす。故に自ら守る也。下文云。不レ可レ勝者守也。又云、守則不足、孫子自釋せし其文甚だ明かなり。云々。

前に所謂不レ可レ勝者は守り也。可レ勝者は攻る也。此に至つて、孫武自ら篇首二句の義を釋し得たり。

守るは其勝未だ必とせず、所謂不足なり。攻むるは其勝すでに全し。所謂有餘也。

といつてゐるのであつて、守れば則ち足らず、攻むれば則ち餘り有りとはよんでゐないやうである。守ればではなく、守るはとよみ、攻むればではなく、攻むるはよんでゐることが明かである。

しかして、守るはとよむ以上は、守るは則ち足らざるが故であり、攻むるはとよむ以上は、攻むるは則ち餘り有るが故である、と見てゐるものと解すべきであらう。果して然らば、白石の所見も亦私見に一致する。

攻守の關係

1. 攻むれば（やがて、又はつひに）足らず、すなはち守るなれ。守れば（やがて、又はつひに）餘り有り。すなはち攻むるなれ。

2. 攻むれば（やがて）足らざれど、攻むるは（すでに）餘り有ればなり。守れば（やがて）餘り有れど、守るは（すでに）足らざればなり。

3.

攻むれば（つひに）足らざれど（すでに）餘り有りてぞ攻むるが故に、攻めて勝つ例多きなり。

4.

攻むれば（つねに）餘り有りせば、攻めて敗るる事（例）や有る。

○

孫子の所謂「攻則有餘、守則不足」の一句八字を、唐の李靖（李衞公）は、右のやうに解してゐるものの如くである。これは、攻擊は最良の防禦なること、攻擊精神なき防禦は所詮敗北なることと矛盾するものではないが、實際問題としては、攻擊精神の强調を多少緩うするの弱點を伴ふを免れ難いやうに思はれる。そこに理論の外に、考慮を加ふべき實際問題のむつかしい所がある。しかしそれをしつかり腹に入れておいて敎へると共に、しかも攻守の關係そのものは、やはり右の如きものである事をよく究めておくことが肝要必須なりと信ぜざるを得ぬ。大局を擔當する場合において特に然り。攻むれば常に餘り有りと簡單に解すが如きは決して攻守の理を眞に把握したものとは認め難い。孫子の兵法はそんな單純な考方のものではないと思ふ。

飛ばざれば落つる飛行機、空中戰、
攻擊せざれば擊墜せらる。

奇　正

○

正を以て合ひ、奇を爲して勝つ。正はもとよりあるものなれば、以てといひ、奇はおほむね、時に臨んで、爲すもの、出すものなれば、奇を爲す、奇を出すといふのみ。正を以て奇を以て、といふも必ずしも妨げず。

○

正とは正兵。正道といひ正面といひ、正々堂々の陣などいふの正なり。奇とは奇兵。奇異といひ、奇計といひ、奇襲といひ、奇變などいふの奇なり。

○

昔は幕末風雲の際、高杉晋作等の組織せる新軍制のキヘイ隊とは、正兵奇兵の奇兵隊にして、歩兵騎兵の騎兵隊には非ず。

○

奇兵は三軍にもあり、一軍にもあり、大部隊にもあり、小部隊にもあるべし。但し、いづれにしても、それぞれの指揮者の掌握する所なるは一なり。古への兵法に所謂握奇（アッキ）の語は、即ち、奇兵を掌握するの意より出で、將の司る所といへり。

○

奇中に正あり、正中に奇あり。奇は變じて正となり、正は變じて奇となるは是れ奇正の轉化・展開なり。恰も虛中に實あり、實中に虛あり、虛は變じて實となり、實は變じて虛となつて、虛實の轉化・展開するに似たり。

○

正兵奇兵を用ふる、昆蟲界の兵家に蠍（サソリ）あり。形は北海道のザリ蟹に似て鋏あ

り。すなはち、其の蟹の如き鋏を以つて、相對しつつ、さつと尾を上方に曲げ、天の一方から相手の不意に、尾端の毒針を打ちおろし、勝を制する。その鋏をもつて、正面から對するは、正兵といふべく、不意に尾端を曲げて、毒針を刺すは、巧みに奇兵を出すものといふべし。

○

奇兵の出し方は、相手に見拔かれず、見きはめられざるを肝要とす。見拔かれ、見きはめられては、奇兵の奇たる所以を失ふべければなり。これを三月十日の奉天包圍戰についていへば、正面に向へる第一、第二、第四軍は正兵にして、左翼迂廻の乃木第三軍は奇兵なり。而してクロポトキンの失敗は、日本軍の此の奇兵すなはち乃木軍の出方をはかりあやまれる所にありき。

○

古人の所謂正を以て合ひ、奇を出して勝つに、敵若し我が正を以て正と見、我が奇を奇と見る時はこれを如何にすべきか。曰く、我は我が奇を正に變じ、我が正を奇に變じて、これに勝つべき也。敵若し我が正を奇と見、我が奇を正と見る時は、これを如何にすべきか。曰く、我は我が正を正とし、我が奇を奇としてこれに勝つべき也。　は是れ奇正の轉化無端の妙用也。

○

韓非子は達文。正々堂々の論陣を張る。莊子は妙文。天外の奇想をもつて人の意表に出づる。一は正兵を布くに巧みにして、一は奇兵を出すに妙を得たり。これを兼ねて、よく正奇縱横の概あるものは、孫子が兵法十三篇の文章なり。

虛實

○

兵法は虛對實(キヨタイジツ)なり。虛實(キヨジツ)なり。

○

虛實の轉化・相生、虛は實となり、實は虛となる。虛實々虛なり。

○

虛對虛、實對實の虛々實々は兵法に非ず。兵法は虛對實、實對虛の虛實々虛なり。虛が實となり、實が虛となるの虛實々虛なり。

○

虛實轉化して虛實々虛となり、虛實展開して虛實々虛となる。いひかへれば

虛實々虛とは虛實の轉化なり、虛實の展開なり。

○

虛々實々は、其の傳來の兵法的意義においても、虛實の單なる重複、繰返へしに過ぎず、虛實の轉化・展開を示すに由なし。

視生處高の古義・原義

孫子の行軍第九篇に、「視ㇾ生處ㇾ高」（生を視ては高きに處る）の生の字の古義本義に關する孫子國字解の見解。

生を視るとは、生は草木のある處なり。視るとは見つくらふことなり。森林又は茅野など草木のある所を見つくろひ、その森林又は茅野などの取り様にて得多きものなり。云々。曹操の註に、生は陽なりといへるを受けて、李筌・杜牧・陣皞・賈林・梅堯臣・張預・劉寅・黄獻臣・彭繼耀みな視るといふを只目に見る意にして、陽を前に受くるといふ義にて、東南に向ふことを云ふと說けり。兵は陰道なれば、陽氣を受くる時は、勝つなどいふ說あり。皆な迂遠の僻說なり。下文に平陸に軍を處くには死を前にし、生を後にすといふ文あり。平陸にては、西北を前にし、東南を後にすべき道理なし。云々。總じて、古書は字義を第一とす。生の字は土に從ひ、山に從ふ文字にて、中は草なり。草の土より生じたる貌なり。故に字の本義は、草木の土より生ずることを生といひて、それより轉じ用ひて、其外の生類の生まるるにも、又、生活の義にも用ふることなり。古書の字義は暗くして、古來の註みな誤れり。——と大いに氣焰を吐いてゐる徂徠である。徂徠の古文辭學は五十歳以後の事である。然るに孫子國字解は、徂徠中年の作だといふから、おそらく、古文辭學以前の作かと思はれる。しかも生の字の古義本義を尋ねて解釋の方法論とすること右の如くである。

兵者詭道也の古義・原義

孫子の始計第一篇に「兵者詭道也」（兵は詭道なり）の詭の字の古義・原義に關する「譯文筌諦」の見解。

徂徠は「孫子國字解」の二個所において、また「鈐錄（ケンロク）」戰略篇の二個所において、詭の字の古義・原義から、「兵は詭道也」の句を解說すること、頗る精妙をきはめてゐるが、これより更にずつと以前、卽ち徂徠二十五・六歲の時にあらはした「譯文筌諦」の中に、すでに詭の字の本義・原義に就いて述べてゐるものがあるから、それをここに紹介しやう。

詭の字はアヤシとよみ、タガフとよみ、イツハルとよめども、畢竟なにとしたることやらん、仔細の知られぬ變りたる態をいふ也。孫子に兵は詭道なりといへるものも、古來いつはるとよめども、兵の道敵の何とも測り得ぬことをして、敵の視聽を變亂し、うろたえさすることとなり。機變百出して、目まぎろはしきことなり。畢竟して和語にいふ、手をするといふ意味にて通ずべし。或は又、まぎらかすといふ譯然るべし。詐僞等の字と頗る殊なり。云々。

然るに、素行の「孫子諺義」も白石の「孫武兵法擇」も共に、詭の字を詐の字、僞の字と全く同義に解してゐるのは、なんとしても、いささか粗漏・淺薄たるを免れぬと思ふ。

白石の孫武兵法擇副言に曰く、詭は詐也。軍爭第七篇に兵以ㇾ詐立と云ふも亦此義なり。下にいふ十四者は卽ち詭道のことなり。

偶中と必中

中るはあたつても、紛れ中りでは、まだほんとうの中つたとはいふことが出來ぬ。ほんとうに中るは、未だ發せざるに既に中るが、中るといふもので、古語にいふ所の未發の中あれば、發して節に中るの和ありといふは是れである。是れはすでに、必ず中る所の筋合があつて中るのである。中るもここまで來ねば、ほんとうの中るではない。節とはちやうど程よきにかなふ事。孫子の所謂鷙鳥の疾き毀折に至るものは節なり。電光石火、鷹の小鳥を捕へるは節に中るのである。善く戰ふ者は其の節短し。其節短促にして遲緩的ならざるを要する。さて弓術に就いて支那の古書に面白い話がある。

昔、列子が弓を射ることを學んで、中るやうになつた。それで先生の關尹子にもう十分でせうかと、伺つたところ、先生の問ふやう。君は君の弓がどうして中るか、その中る所以のものがわかつてゐるかネ。列子。いやそれはまだわかりません。先生。それではまだ駄目ぢや。そこで列子は退いて更に弓を習ふこと三年にしてまた先生に伺つた。先生は前と同樣にまた、君は君の弓がどうして中るか、其の中る所以のものがわかつてゐるかネと問ふ。こんどは列子、はいわかつてをります。と答へると、先生いはく、それをよく守つて失つてはいけない。ひとり弓を射る場合だけの事ではない。と敎へたといふ話があるが、戰ひに勝つことも亦、斯くの如し。ただ勝つだけでは充分といへない。勝つ所以のものを知らなければならぬ。兵法を學ぶの要ある所以である。

孫子の必勝主義

孫子兵法の顯著なる特色の一つは、必ず勝つといふことの强調であらう。といへば人は或は反問せむ。凡そ兵法は勝つことを主眼とする。如何にして必ず勝つかの法を講ずるものが、そもそも兵法なるものではないか。何ぞ孫子に限るべきかと。

然り。だが、必ずしもさうとはいへぬのである。といふのは、例へば、いはゆる二つの可能性と呼ばれるもののやうに、勝敗をあらかじめ決めてかかるのはよくない。先づ戰つて見ねばわかるものでないといふのがあるからである。昔澤庵和尙が劍道の柳生但馬守に敎へた言葉に、

二途にわたりて分別きはまらざることをすれば必ず惡しし。これ血氣にまどはさるる也。此の事をなさんと思はば、一道に從ひてよし。二途にわたる程ならばすべからず。

といつてゐる。まことに至言といふべし。右に二途にわたりて分別きはまらざる、それがいはゆる二つの可能性である。

然るに孫子をよむと、到處必ず勝つといふ文字が讀者の眼を射る。他の六兵書いづれを見ても、孫子のやうに、必勝を强調し、必勝の所以を闡明するに努めてゐるものはないと思ふ。

孫子十三篇、始計をもつてその第一篇とし、將、吾が計を聽き之を用ふれば必ず勝つと斷ずる孫子である。五事七計、以て彼我の情勢を比較考量し、算多きものは勝ち、算少きものは勝たず、しかるを況んや、算無きにおいてをや。吾此において、之を觀る。勝負見ゆといふ。孫子の五事とは一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地、四に曰く將、五に曰く法にして、其の七計とは、一に、

主いづれか道有る、二に、將いづれか能ある。三に、天地いづれか得たる。四に、法令いづれか行はる。五に、兵衆いづれか強き、六に、士卒いづれか練れる。七に、賞罰いづれか明かなる。

此の七項目の比較計算をいふのであつて、彼を知り己を知れば、百戰あやうからず。彼を知らずして己を知れば、一たびは勝ち、一たびは負く。彼を知らず己を知らざれば毎戰必ず敗る。そして、かかる必勝主義よりして、孫子は勝兵は先づ勝つて、而して後ちに戰を求む。これに反して、敗兵は先づ戰つて、而して後ちに勝ちを求むといひ、つひには、戰ひの道、必ず勝たば、主、戰ふなかれと曰ふも、必ず戰つて可なり。戰ひの道、勝たざれば、主、必ず戰へといふも、戰ふなくして可なり、とさへいつてゐる。これを譬ふれば、孫子の必勝主義は、對島と決めて待ちうけ、必勝を期して戰つた五月二十七日の丁字戰法の如く、これに比して二つの可能性は、恰も對島か津輕か決めざるを主義とするやうなもので、すなはち孫子によれば、先づ戰つて而して後ちに勝ちを求むる底の算無き兵法、必ず敗るるの兵法である。

孫子の語句六題

○

善く兵を用ふる者は率然の如し。率然は常山の蛇なり。其の首を擊てば、則ち尾至り其の尾を擊てば則ち首至り、其の中を擊てば則ち首尾俱に至る。

此の率然の陣形を長蛇の陣ともいふ。日本海々戰の日本艦隊は終始、此の長蛇陣で戰つたのであつた。

○

將に五危有り、必死は殺すべし。必生は虜にすべし。盈速は侮るべし。廉潔は辱しむべし。民を愛するは煩はすべし。凡そ此の五者は將の過ちなり。軍を覆へし、將を殺す必ず五危を以てす。

五丈原對陣中の孔明は仲達に對し、此の中、第三の一危にかけやうとしたが、仲達これにかからず、却つて孔明自ら第五の一危にかかつて陣歿してしまつた。

旅順港のマカロフ提督は第三の一危にひつかかつて爆沈してしまつたのであつた。

○

古への善く勝つ者は勝ち易きに勝つ者なり。

善く命ずるものは、命じ易きに命ずる者なり。善く教ふるものは、教へ易きに教ふるものなり。みな此の理による。

勝ち易きに勝つとは、弱いものに勝つといふ意味ではない。命じ易きに命ずるとは、柔順にして御しやすい者に命ずるの意味ではない。教へ易きに教ふるとは、わかりのいい頭のいいものに教ふるといふ意味ではない。

○

善く戰ふものは人を致して人に致されず。

人を致すとは、敵を致すなり。致すとは引致（インチ）などいふ場合のいたすなり。至らしめるの意なり。至らしめるとは、引きまはす、或は引きつけることなり。

此の孫子の語句に對し、日本の古語には、だしぬく、――思ふ壺にはめる――等の語あり、だしぬくとは、いだし――引き出し――拔くなり。

○

善く守る者は九地の下に藏（カク）れ、善く攻むる者は九天の上に動く。

斯くの如く善く守る者にして、よく攻めることを得、斯くの如く、善く攻める者にして、よく守ることを得、ばらばらに見るべからず。

○

其の疾きこと風の如く、其の徐かなること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷の震ふが如し。

風と林と火とつづき、山と陰（雲霧）と雷とつづく所、所謂紛々紜々として鬪ひ亂れて亂るべからざる趣がある。此の句の順序を若し一つでも動かしたなら、忽ち、かかる妙味を失ふ所に、流石に語句を用ふる兵を用ふるが如き孫子の文章なる哉と感嘆せしめるではないか。

此の六句もばらばらに見るべからず。分數形名奇正の法によく通達したる名將の備へは、此の六句の妙用を兼備するものなれば、六句一體である。其疾きこと風の如くたり得る者にして、よくその徐かなること林の如くなるを得べく、徐かなること林の如くたり得るものにして、よく疾きこと風の如くなるを得る。等々。

武田信玄が、此の六句中より四句を採つて旗に大書し、その陣營に押立て

てゐたことは、すでに述べたる所の如し。

九天の上、九地の下、」
攻防今や立體戰。

六書は孫子の註釋に過ぎず

——七書の隨一としての孫子——

武經七書、其の隨一を孫子とする。

七書とは一に曰く孫子。二に曰く吳子。三に曰く三略。四に曰く司馬法。五に曰く尉繚子——ウツリョウシと訓む。六に曰く六韜。七に曰く李衞公問對の七部集。但し右の順序は覺え易いやうにと筆者が序列したるにすぎぬ。其の時代からいへば、司馬法と孫子が春秋の世で最も古く、最後の李衞公問對が唐初のものなるを別にして、其他は春秋に次ぐ戰國時代の作と考へられる。尤も三略と六韜は傳說によれば、司馬法や孫子よりも更に古きものだが、實際は戰國乃至其後において後人の假托した僞作と稱せられる。就中、六韜の如きは、春

秋時代以前には見られなかつた騎兵戰のことなどをも詳論してゐる所から戰國以後のものなることに、疑ひの餘地を存せぬ。尉繚子は農民兵の事など論じてゐて、秦による天下統一以前のものたること、また明瞭である。天下統一前、秦の富强をはかつて名ある商鞅にも兵法論一篇があつて、農民兵のことを論じてゐるが、尉繚子がやはり、それを唱へてゐるのである。

家康は六韜三略を最も愛讀したらしいが、三略は政治論が多いし、六韜は孫子を敷衍解說し、且つより各論化したやうな兵書で、實際的見地からは最も便利に見える點から、家康のやうな政治家的武將の愛用に適したものと考へられる。

李衞公問對は、唐創業の太宗と唐將李靖——後ちに封ぜられて李衞公となつた將軍との兵法問答書で、實際問題も論じてゐるが、孫子兵法の解說的部分が多く、六韜の前述の通り、孫子の實際的乃至各論的敷衍的註解書たるに對し、此れは寧ろ、奇正とか虛實とか、攻守とか、いはば原理的乃至總論的解說において、頗る見るべきものがある點において、此の書の特色があると思ふ。

吳子の姓名は吳起といひ、魏に仕へ、後ち楚に相となつた。其の兵法書はすなはち魏の武侯の問に答へたものであるが、其の魏のために、西河を守り、近隣諸侯と大いに戰ふ事、實に七十六回。うち全勝六十四回、その他は勝負なしの引き分けといふ得點表にて一度も負けに終つたことはなく、なかなかの實戰的兵家であつたやうである。後世孫吳の兵法といつて、孫子と並び稱せられるが、しかし今日傳ふる所の彼れの兵書は僅かに六篇を存するのみの斷片に過ぎず、到底孫子と比肩匹敵し得べきものではない。且つ人間として、隨分缺點のあつた人物のやうである。孫子のやうなゆかしい風格を缺いてゐる。

孫子の兵書に對して、最も獨立的な存在たるものは、司馬法であらう。孫子と比較して、此の司馬法には、たしかに色々獨特な所が見られる。

すなはち、これには、戰爭は農業の閑散期を見て戰ひ、收穫の多忙期には休戰ずべきことや、逃ぐるを追ふも百歩にやむべしとて、長追ひすべからずなどと說いてゐるから、餘程古い時代のものであつたことを疑へぬ。

幕末外艦渡來の前後、山鹿流の吉田松蔭が、なに黑船も孫子兵法火攻の法で燒き拂へば可なりとせるに反し、蘭式砲術家の佐久間象山等が、先づ近代的兵法と大砲の必要を力說するにあたり、物を見ては倂しうするが、古來の兵法なりと論じたが、此の「物を見ては倂しうせよ」の句は實に司馬法によるのである。

日露戰爭では、日本軍は最初機關銃なく、露軍のマキシム機關銃に頗る驚き且つ惱まされたが、大砲では逆に日本軍の海岸砲の奇想天外的山上使用——二十八サンチ砲の使用が旅順籠城軍をめんくらはせたことは、また非常なものであつたらしい。

世界大戰では、英軍の怪物的タンクに、ドイツ軍の驚愕措く所を知らなかつたことが傳へられてゐる。これらは司馬法に所謂敵の有するすぐれた武器を見て、未だこれと倂しうするを得なかつた顯著な二、三の例である。

そして、此の方面のことは却つて、孫子の兵書には閑却されてゐるが、然し全體として之を見れば、何といつても孫子が斷然七書の隨一たるは爭ふの餘地がない。況んや孫子十三篇、首尾完結、しかもそれがほぼ原形のままに傳はつて、ひとりその內容のみならず、また文章がまことに千古の名文で、斷然他の追隨を許さぬにおいてをやである。

武經七書といふも吳子以下の六書は畢竟、孫子の註釋にすぎないといつてよい。

三、孫武の人柄

孫武の人柄

孫子は名を武（ブ）といひ、齊（セイ）の人であつたが、伍子胥のすすめにより、吳王闔廬に來り仕へて、上將軍となり、軍事を以て吳國の强大に大いに貢獻する所あつたが、吳王政を怠るに及び、脫然辭して齊に歸り、亂世に生を完うして死んだといはれる。

名前からいへば、孫武（ソンブ）、今南京中山陵にミイラとなつてゐる孫文といい對照をなしてゐる。

孫子の傳記は、司馬遷の史記列傳や通俗列國志などに出てゐるが、くはしいものではない。

其他に何かくはしいものが、支那にはあるかどうか。

孫子に在つては、兵法と文章法と人物性格との三者がよく渾然一體、一にして三にあらざる關係を成してゐた如く考へられる。彼の文章には獨自の性格がある。個性的迫力がある。

孫子は主將たるものの心得を說くことつまびらかにして、將の五德・五危の說がある。すなはち智信仁勇嚴を以て名將たるもののそなふべき五德とし、必死は殺すべし、必生は虜にすべし、忿速は侮るべし、廉潔は辱しむべし、民を愛するは煩はすべし。此の五者を主將のいましむべきあやまちとし危險とする。又、將軍のことは靜にして以て幽に、正しくして以て治まる、といふ孫子である。靜にして以て幽とは、無形至極にして、或は渾々混々として、形、圓にして外よりはかり窺はれぬこと。正しくして以て治まるとは、正大整治、人をして敢て侮り犯さしめざるの意味。これが名將である。すなはち孫子自身の性格でもあつたらう。すくなくとも、孫子自らの所期であつたにちがひない。

筆者此頃、在支二十年といふ一畫家の長江沿岸を描いた「江南百題」を讀むに、孫子が吳王を去つて、隱退後、兵法を講じたといふ家の址が、今もなほ鄂城といふ古都に殘つてゐるといふ。

鄂城とは黃石港と赤壁とのちやうど中間に位する江岸の一古都である。後人の假託する所かも知れぬが、一說としてしるす。今に大陸のどこかで、孫子の墓碑なども出て來さうに思はれる。大陸の戰火なほ未だ熄まず、神武(シンブ)日本軍の進軍と其の必勝不敗の戰法の展開とに、地下の孫武・孫文と相顧みて必ずや感慨無量なるものがあらう。

孫武の人柄は吳起と著しく趣を異にする。吳起はむしろ商鞅などを思はしめる處がある。一口に孫吳の兵法といふが、孫子と一緒にして吳子をいふは、あらゆる意味においてあまり妥當ではないと筆者は考へざるを得ない。

白石の孫子人物論

孫子の人物論において著者と其の見る所を一にすると思はれるものに、昔は新井白石がある。

白石は「必定、此後、孫子にて世の害出來候はでは叶はぬ時勢とたしかに見つけ候」とて、時勢に慨するところから、孫子の註釋書を失脚後失意不遇の晩年に著したのであつて、「とかく今日、太平の世の政治をも孫子の心得にて、人を詭(イツハ)り欺きみづからの私智を以て生民をも愚にし候が武家の面目となり候やうの毒を天下に流し候事出來候か、」とて、「人をいつはり欺きみづからの私智をもつて生民を愚にする」を「孫子の心得にて」といつてゐるのであるが、しかも、孫子自身の人がらに就いては、決して惡くいうてをらぬ。否な、文章と

共に人がらはこれを大いに賞揚して、「人がらもいかにもしほらしき所これある人のやうに見え候。」といつてゐるのは、會心の至りであるが、惜しいかなくはしくは論じてをらぬ。これだけの寸評にとどまる。

五德五危の說

仁義禮智信の五つが、古への德目なるは、人のよく知る所にして、伊達政宗の家訓が此の德目をとらへつつ、仁も過ぐれば弱となる。義もすぐれば固となる。禮もすぐれば諂となる。――へつらひとなる。智もすぐれば虛となる。――うそをつくことになる。信もすぐれば損となる。――損をする。すなはち仁義禮智信も程々にすべく、過ぎては弱固諂虛損となると、戒めてゐるのも亦、有名だが、孫子が名將の德目として敎へる所は、仁義禮智信の義に代ふるに勇、禮に代ふるに嚴を以てしたる上、少しくその序列を變更したるもの。すなはち智信仁勇嚴の五德目。是れ孫子兵法が主將たるものに求むる所である。孫子が所謂五事の一に曰く道。二に曰く天。三に曰く地。四に曰く將。五に曰く法。

――の四に曰く將とは、是れであつて、彼我の主將いづれが、智信仁勇嚴なりやを比較計量すべしといふのである。

兵法は人を致して人に致されざるに在る。故に自ら智信仁勇嚴にして敵に致されざると共に、またよく敵將を致すの術を解して、これを施すことを得なければならぬ。

ここにおいてか、五危の說あつて、孫子曰く、將に五危あり。死を必するは殺すべく、生を必するは虜にすべく、忿速なるは侮るべく、廉潔なるは、辱しむべく、民を愛するは煩はすべし。凡そ此の五つの者は將のあやまち也。兵を用ふるの災ひ也。軍を覆へし、將を殺す、必ず五危をもつてす、察せざるべからざる也と。死を必するの將、生を必するの將、忿速なるの將、廉潔なるの將、民を愛するの將、いづれもそれぞれ右の如き手段を施して、これを致すことが出來るといふのである。

昔は五丈原頭に對峙抗爭の諸葛孔明と司馬仲達。孔明は挑戰してすみやかに仲達を戰敗せしめんと婦人服をおくりて、仲達をはづかしめたが、仲達は其手に乘らず、却つて間者を以て、孔明が食事の模樣をさぐり、其の食事次第に進まざることを知つて、敢て出でて戰はず、孔明をぢらし、いらだたせて、これに勝たんことをつとめた。死せる孔明、生ける仲達を走らすの語は、此の對局をもつて、孔明の勝ち、仲達の負けかの如く思はせ勝ちだが、實は孔明こそ、却つて孫子の所謂將の五危の一危にかかつたものではなかつたか。

旅順港のマカロフ提督は、かねて、海軍戰略家として、世界的名聲あり、且つ港內でも信望を一身に集めた提督であつたが、其の未だ一戰も交へざるに脆くも、敷設水雷にひつかかつて轟然艦と共に爆死して、期待された名戰略もつひに何等施すに由なくして果てた所以のものは何か。數隻の露艦を追ひ來つて、港にまで迫らんとした日本驅逐艦を見て、何を小癪なと激怒の餘り、此の

日に限りいつもは出港にあたつて必ず行ひつつあつた掃海を忘れて、やにはに飛び出したからであつて、これまさにいはゆる將の五危に忿速はこれを侮るべし。――で五危中の一危にかかつたものではなかつたか。

四、孫子兵法と支那

聲を先きにして實を後にする支那兵法

――史記と潘岳の詩に表現されたる支那兵法――

孫子の兵法に、「兵は詭道なり」の句、また「兵は詐を以て立つ」の句がある。

新井白石は、これを一概にイツハリ・アザムクことを以て、兵法は其の根本となすものと解し且つ武家の兵法の由つて來たる所も實にここにありとし、此の二句を孫子排擊の的として、「孫武兵法擇」を著した。

これに對し、荻生徂徠は、其の博引旁證をきはめた孫子兵法註釋の一大集成ともいふべき「孫子國字解」の著において、孫子の眞意は、あながちに、イツハリ・アザムクを本旨とするものに非ず、無形至極の理によつて、所謂深間(シンカン)も窺ふ能はず、智者もはかる能はざらしめて、だし拔けに、相手を我れの思ふ壺にはめんとするのが、孫子の說かんと欲する所である。唯これを出し拔かれ、思ふ壺にはめられた相手よりすれば、其の所以はわからずに、結果のみかわるから、偏へにイツハラレ・アザムカレ・ペテンにかけられた如く思ふのであると解して、右二句の辯護に最も努めてゐるのは、頗る興味深い對照だが筆者の所見によれば、いづれも稍々一方に偏しすぎて、爲めに中正妥當を缺ぐ所があるやうに思ふ。

これを先づ、字義の上より見んか。

詭道の詭の字は、アヤシキこと、すなはち、物事の種々樣々にかはつて、アヤシク思はれるの意味で、詭形・詭祕・詭怪・詭變等と熟語し、從つて、イツハリ・アザムクと訓じても、それは右の本義アヤシキことから來たもので、普通にいつはりあざむくの詐の字・欺の字・僞の字等とは、自ら其の意義を異に

するのである。然るにかかる區別を全く看過して、白石が、——

兎角、今日太平の政事をも、孫子の心得にて、人を詭り欺き、自らの私智をもつて、生民を愚にし候が、武家の面目となり候樣の毒を天下に流し候事出事候か。必定、此の後ち孫子にて世の害出來候はでは叶はぬ勢とたしかに見つけ候。

と非難するは、あれ程の識見に加ふるに、殊に深奥なる言語學の造詣をもつて、つひに、此の點、偏狹固陋なる凡庸儒學者の偏見と選ぶ所なきを惜まざるを得ぬ。

之に反し、徂徠が詭の字の本義に立ち、無形至極の理をもつて、辯護大いに努むるは、兵は詭道なりの句に關する限り、我等も贊成だが、兵は詐を以て立つの句をも同樣の意味に徂徠が說くのはどうかと思ふ。

筆者の所見によれば、此の兵は詐を以て立つの思想こそは、凡そ孫子兵法の背景をもなす所の廣い意味における支那的兵法思想を表現するものであつて、つとめて無形至極の兵理を强調する孫子にも、それが此の詐を以て立つの數語に、その片鱗をとどめてゐるのではないか。詐の字は文字通り、イツハリ・タバカルことと解するの外ないと筆者は考へる。白石は詭の字の本義を見ず、これを詐の字と同樣に見て、一概に非難し去り、徂徠は反對に、詭の字の本義と同樣に詐の字をも解して辯護し了せりとする。

兩者共に偏せずやと筆者の見る所以である。

徂徠の說は、孫子の解釋としては、それでもよいが、廣い意味での支那的兵法思想の一大特色をつひに看過し去るの外なきに至らしめる點において、缺陷を免れぬと思ふ。

孫子にも他の六兵書にも見當らぬが、史記の淮陰侯(韓信)傳に、——

兵は聲を先きにして、實を後ちにす。

の句がある。その意味は口先きで大きなことを言つて先づ、人を驚かして、實力を出すはあとまはしにする。それが兵法だといふのである。

さらに潘岳の詩に、――

兵は固より詭道、聲を先きにして實を後ちにす。

といふ。特に此の詩句において、注意をすべきことの一つは、ここで詭の字が詐の字と全く同じ意義に用ひられてゐる事。其の二は、史記の所謂聲を先きにして實を後ちにするの句が、ここでは詭道、詐を以て立つの一手段乃至一註釋として考へられてゐることであらう。

これこそ古來の支那的兵法思想本來の一特色が、詩人の口をかりて、端的直截に自らを表白したものではないか。

孫子の兵法に上兵は兵を討ち合はずといふからと、電報を打ち合つた支那舊軍閥の「電報戰」なるものは、孫子兵法の漫畫的實演であると同時に、右の聲を先きにして實を後ちにする支那的兵法思想の如實な具現でもあつた。

前述徂徠の如く、兵は詐を以て立つの句をも併せて、無形至極の理をもつて解すべしとするの結果は、聲を先きにして實を後にするを詐を以て立つの一手段乃至一註釋とする支那的兵法の特色を看過することになる。そしてこれを看過することは、孫子兵法の背景を展望せざることを意味する。

是れ筆者が、徂徠說を半ば肯ひ、半ば肯はざる所以である。

詭の字の解釋表

白石の所見　詭（イツハル）＝詐＝欺（權謀術數）

徂徠の所見　詭（アヤシキ）（無形至極の理）

詐（無形至極の理）

潘岳の所見　詭＝詐（權謀術數）

詐の一手段乃至一註釋――聲ヲ先キニシテ實ヲ後チニス

私見　詭（アヤシキ）（無形至極の理）

詐　イツハル、アザムク

聲ヲ先キニシテ實ヲ後チニス　（廣い意味での支那本來の兵法思想）

權謀術數

孫子兵法の漫畫化的實演

謀攻第三篇の眼目は、百戰百勝をもつて善の善なるものに非ず、戰はずして人の兵を屈するをもつて、善の善なるものとする。故に上兵は謀を伐ち、其次は交を伐ち、其次は兵を伐ち、其の下は城を攻む。城を攻むるの法はやむを得ざるがため也、といふ。

いひかへれば、城を攻むるは、兵を伐つにしかず、兵を伐つは交を伐つにしかず、交を伐つは謀を伐つにしかず。攻城の事は最下策にして、兵をうち合ふは、それに次ぐ下策だといふのであつて、まことに然り。孫子の意味するところは、なかなか深いのであるが、これを淺薄皮相に解して、兵をうち合ふのは兵法の下策だからと、專ら電報を打合つて、いひかへれば、いはゆる聲を先き

にして、しかして實を後にするの戰法を以て、兵法の眼目とした支那舊軍閥の「電報戰」なるものは、孫子兵法の漫畫化的實演であつたといつてよい。

支那知行說の弱點

支那戰國時代の刑名法術家の商鞅は知るは易く行ふは難しとした。知易行難說である。知易行難說の行はマキアベリズム的たるを免れなかつた。

これと反對に近代の孫文は知るは難く行ふは易しとした。知難行易說である。知難行易說の行は妄動的たるを免れない。

宋代の儒者所謂朱子學の朱熹は先づ知つて後ちに行ふとした。先知後行說である。先知後行說は實行に迂遠たるを免れなかつた。

これに對し、明代の儒者王陽明は、知は行の始め、行の主意にして、行は知の工夫、知の成れるものとした。

知行合一說である。だが、知行合一說も詮ずれば、先知後行說と五十步百步

の先知論のみ。

これに對し、日本は由來、行知統一說である。知行合一說は逆立して頭で立つてゐる。行知統一說は足を大地に踏張つて立つ。知行合一說、略して知行說は要するに、知りて行ひ、行ひて知る。知が始であり、知が主であり、別言すれば、行を知るである。

これに反し、行知統一說、略して行知說は、要するに、行ひて知り、知りて行ふ。行が始であり、行が、主であり、別言すれば知を行ずるである。

知易行難說、知難行易說、先知後行說は何れも行と知との交互作用を認識せざるに反し、知行合一說は此の交互作用を明かに認むる點においては、行知統一說と其の軌を一にする。だが、彼は端初に知があつたと思惟するに反し、此れは端初に行があつたと體得する點において、全く逆である所が大いにちがふ。

古來支那では、「先づ聲を大にして、實を後ちにす、」といふのが、兵法の根本要領だが、日本では電光石火の奇襲をもつて、だし抜くのが兵家の期する所である。これを日常市井の言動に徵しても、支那街の喧嘩は相手より見手（見物人）の山に訴へて、相手を口で罵り立てるのが常である。喧嘩といふ文字が元來、口でやかましく大聲にて罵るといふ意味だが、それが文字通り支那人の喧嘩である。然るに江戸兒の喧嘩は、先づ手を以て一擊をバーンと相手に加へてから文句をいふのがならはしであつた。口より寧ろ手である。言葉よりは寧ろ行動である。

支那の孔子は、「言訥にして行に敏なる」を君子の理想と說いた。何でも行よりは言を先きにする、いはゆる先づ聲を大にして、實を後ちにする弊風を憂ひ之を矯めんと欲したものであらうが、支那人は寧ろ言は雄辯にして行には不敏なるが國民性のやうである。そして言訥にして行に敏なるもの、孔子のいはゆる君子なるものは、古來つねに日本人の方ではなかつたか。

以て茲に、支那の知行說と日本の行知說、支那の兵法と日本の兵法との一相違點を端的に見ることが出來ると思ふ。

した手に出れば附け上る火には
うは手に出でて、つけよ向ひ火。――向ひ火戰法。

五、日本古兵法の精神と其の自覺・復興

孫子兵法は日本古兵道の一註釋に過ぎず

——孫子の研究と日本古兵法固有の精神との關係——

兵家孫子を出したのは、支那であつた。しかも眞に孫子兵法を理解し活用したものは、寧ろ日本であつた。

日本は孫子兵法の長所をよく自家藥籠のものとして善用し、支那は孫子兵法の短所を墨守して孫子兵法の漫畫化を實演するに終つた。支那舊軍閥の電報戰なるものがそれである。

古へより日本は細矛千足（クハシホコチタル）の國と稱して武を尙ぶの國。支那は自ら中華と誇つて寧ろ文華・文弱を喜ぶの國。由來支那刀は銅刀の鈍刀、日本刀の鐵刀利刀に匹敵すべくもなかつた。支那には孫子の兵書あつて、しかも眞實兵法の道なるもの曾て有る無く、日本には孫子兵書の渡來以前既に立派に日本的なる兵法の道が存在してゐた。具足してゐた。此の事は古事記・日本書紀を見れば、炳としてまことにあきらかである。孫子の兵書が渡來して始めて、兵法を知つた日本人では斷じて無い。

吳子以下の六兵書は、畢竟するに、孫子の註釋にすぎず、孫子はまた我が神（シン）武（ブ）日本兵道の一註釋にすぎない。

是れ日本が孫子兵法の長所・短所をよく取捨して、巧みに自家の藥籠に收め得た所以であつて、孫子の兵法を研究せんと欲するものは、此の事を先づ、しつかりと念頭においてかからねばならぬと思ふ。

日本で孫子の兵書が他の六書と共に、大いに學問的に研究されたのは、實に德川時代のことにして、山鹿素行の「孫子諺義」、新井白石の「孫武兵法擇」、荻生徂徠の「孫子國字解」、松宮觀山の「士鑑用法直旨鈔」、平山兵原の「孫

子折衷」、佐藤一齋の「孫子副詮」等々が數へられる。

明治以後の孫子研究にして、就中、山鹿の「孫子諺義」、荻生の「孫子國字解」等に、多かれ少かれ何等か負ふ所ないものは一つもないといつてよい。

殊に、徂徠の「孫子國字解」は、字句の註釋書としては、まことに古義・原義をたづね、博引旁證をきはめて、日支兩國におけるあらゆる孫子註釋書の一大集成たるの觀があり、眞に類書中の珠玉として光彩あるものだが、その研究態度の上には不十分なるものあるを蔽ひ難い。實例の引用が概ね支那古來の事例に限るのは惜しむべきである。しかもなほそれよりも遺憾とすべきは、日本の兵法が孫子の渡來によつて始めておこつたかの如く見てゐる根本的な錯覺である。

徂徠は支那の研究においては、所謂古文辭學派と稱せられる如く、大いに古代にさかぼり、古代精神の復興唱道者として知られるが、惜しいかな日本古代史の研究を缺いた。これは徂徠一派が、日本に元來いはゆる道なるものなく、道は實に儒教の傳來を俟つて始まつたと見る誤謬と其根を一にするものである。

「本朝古今、兵を善くする者、皆な七書の兵法に暗合す。抑も天之を授くるか神之を佑くるか、自ら蓋天蓋地の神兵、聖武の存する有る也。何ぞ必ずしも外邦の七經に待たんや」との日本的自覺に立つて、はじめて孫子の兵法を見たのは、復古儒學から轉じて、日本古學の立場に立つた謫居中の山鹿素行を以て其の先驅とする。そして、素行についで、さらに大いに此の見地から日本古兵道の闡明・復興に努めたのが、——今は其の偉業を殆ど忘れられてゐる——松宮觀山であつた。

德川時代における支那古兵法の學問的研究勃興の中に、我等は斯くして、日本古兵道への自覺がおこり、日本古兵法固有の精神が闡明されるに至つた事を見出して、此等の先覺に敬仰讃嘆の念を新にする次第である。

德川時代における孫子研究

孫子兵法の學問的研究が勃然としておこつたのは德川時代にはじまるといつてよい。

すなはち山鹿素行の「孫子諺義」をはじめとして、新井白石の「孫武兵法擇」、荻生徂徠の「孫子國字解」、松宮觀山の「士鑑用法直旨鈔」、平山兵原の「孫子折衷」、佐藤一齋の「孫子副詮」などが相次いであらはれた。

賴山陽の後裔賴なにがしの最近の筆になる山陽略傳によれば、「易經」、「尚書」、「孫子」の諸篇は成稿を見るに至らずしてやむ」とあるから孫子の兵法に關する著述も計畫だけはあつたものと考へられる。

尤も山陽は古漢文の文章讀本ともいふべき「古文典刑」の中に、孫子の軍形篇を收めて、文章上の評註を加へて、孫子註釋書の萬綠中に紅一點を點じてゐることはすでにくはしく述べたとほりである。

さて德川時代における孫子研究の第一の特色は、字句の解釋に古義・原義をたづねる研究方法の發展であつて、ここでは流石に古文辭學と自ら稱しただけ徂徠の解釋が斷然他の追隨を許さぬ。

第二の特色は、日支の比較研究で、徂徠最晩年の大著「鈐錄」に顯著であるが。此の徂徠流の比較研究の缺點は、日本古兵法の固有的存在と其の輝かしい精神を忘れての比較研究にすぎざる點に存することを注意すべきである。

第三の特色は、孫子の復古的研究勃興の中に、日本古兵道への自覺がおこり、日本古兵法固有の精神が闡明されるにいたつた事で、山鹿素行の赤穗謫居中に成つた「七書諺義」の自序が其の先驅をなし、松宮觀山の「天地圓德卷詳解」、や「神樂舞面白草」が、其の繼承展開と見なし得る。

なほ觀山は長壽九十五歳を以て長逝した。しかして其の著作には實に老齡九十歳九十一歳の筆に成るものもあるから、その點でも亦、頭がさがるのを禁じ得ない。

兵者詭道也の解釋における素行と徂徠の比較

孫子に所謂「兵は詭道也」の語句を素行ははじめ「詭も道なり、いつはりを行ふも皆な大道也」と解したが、後ちこれを改めて、「詭詐も亦、道其中に在り」としてゐるが、詭の字も詐の字も一樣に見て、詭の字の古義原義をたづねてゐないことは終始かはりない。これに反し徂徠は、詭の字詐の字を區別し、詭の字の原義古義の闡明につとめることにより所謂無形至極の兵理とこれを解してゐる。徂徠曰く、「世の常、詭道といへば、イツハリといふ訓ばかりに泥みて、合戰といへば、兎角、表裏たばかりを、軍の本意と定むるは僻事也。アヤシとは敵より怪しみ何とも合點の行かぬことなり。タガフと訓む時は、正しき定格を守らぬことなり。故に兵は詭道なりと云ふは、軍の道は兎角、手前を

敵にはかり知られず、見すかされぬやうにして、千變萬化、定まりたることのなきを軍の道とする也。されば敵よりは之をたばかると思ふ故、いつはりとも訓む也。」

兵者詭道也の解釋における白石と徂徠の比較

白石と、徂徠とは、多くの點で著しくその趣向を異にするにも拘らず、古義・原義による方法論の點では、不思議に符節を合するが如き一致を示す。但し、白石は偶々先秦古典の解釋になると必ずしも丹念に古義・原義によつてはゐないやうである。白石の「孫武兵法擇」がその粗漏を曝露してゐる。讀者若しこれを徂徠の「孫子國守解」と對照一讀せば、思ひ半ばにすぐるものがあらう。

孫子の屢々曲解され非難される所に、「兵は詭道也」の語句がある。此の詭の字を、白石も素行もいつはり、あざむくといふ通俗の意義に解する。唯だ白石と素行との相違は、前者がこれを以て、孫子の兵法はすなはち詐術なりとして非難するに反して、素行は詐術も亦、權謀奇變の妙をつくす所以の一に數へ

る。

然るに、徂徠の「孫子國字解」は、詭の字の古義・原義を尋ねて、アヤシキと解する。アヤシキとは、物事の種々様々に變化して、怪しく思はれることである。すなはちいはゆる兵に形なくして、深間（シンカン）も窺ふ能はず、智者も慮るに由なからしめる。それが詭道なりとする。一言にしていへば、所謂無形至極の兵理である。ひたすらに、いつはり、あざむくを以て手とするならば、容易に逆手を食ふのであつて、却つて兵法ではないといふのが、徂徠の說く所である。けだし孫子の眞意を得たるもので、これでは何人も「兵は詭道なり」の語をもつて孫子を非難する餘地が最早存しないであらう。

なほ徂徠は最晚年の大著「鈐錄」においても亦繰返へし此の解釋を展開してゐる。

「兵は詭道也」、「兵は詐を以て立つ」といふこと、孫子の明文なり。しかるに後世の儒者王道の軍といふことを說き、又謙信流の軍者、表裏は決してせぬ事の樣にいふは、兵の本意を知らぬ故なり。わざの上にて表裏方便をすることは智者のわざなる故、敵表裏に逢ひ、方便に逢うて負くれども、此方の智に服して、後の害なし。但し、交際の上においては、むさくきたなきわざをすれば、戰國の時節なりとも、隣國の怨怒を生じ、一旦、利を得れども、後の害を免れず、不仁無禮なることをする時は、士民思付ずして、其の國、手に入りがたし。故に不仁無禮と信を失ふべきことは遠慮あるべきことなり。總じて陰謀はもと仁の道なり。敵身方の人數を損せず、坐らにして功を收むること是れ陰謀の本意なり。其上聖智の人のする陰謀は陰謀の迹を見せず人その陰謀なることを知ることなし。是れ兵家の極意なり、といふが如き其一例である。

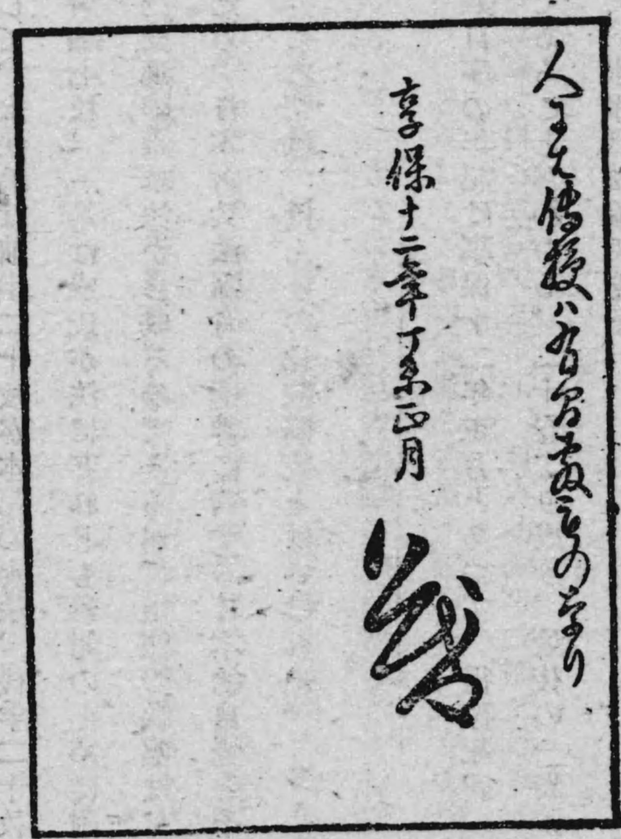
徂徠の日支兵法比較研究の檢討

古文辭學の徂徠は中年にして、「孫子國字解」を著し、最晩年また專ら心を兵法に傾注して、「鈐錄」二十卷の大著を成し、自家の兵法論を組織的に展開した。そして、隨處に日支の比較研究を試みてゐるのは流石に徂徠である。

異國戰略の粗增（アラマシ）と和流兵家の傳ふる所を左に記すなり。

是れは第十三卷戰略篇にいふ所にして、第二十卷水法篇には次の如くいつてゐる。

異國日本の舟軍の仕形殊の外に替りたれども、此の以後、年を經て、大船をも作り覺え船道をも乘り覺えたらんには、用に立つことあるべければ、今此の卷に和漢の船軍を各別に書き載するなり。尤も其内に兩方通用する



徂徠著　鈐錄自序の年記

こともあるなり。

かくして、水法論は前半二十枚が本邦の水法、後半二十枚が支那の戚南塘水軍法、附錄七枚、「是は戚氏が法に非れども參考のために附錄するなり」とて附錄した支那の水軍法から成るのであるが、徂徠の缺陷は日本古代史の研究を缺いだため、日本古兵法固有の精神に對する日本的自覺とその闡明に缺ぐる所がある。これでは、ほんとの比較研究とはいはれぬ。

鈐錄自序の年記は享保十二年正月とあつて、徂徠死歿の前年に完成した著作であることがわかる。二十卷より成り、最後の一卷がすなはち水法と題して、水軍戰法論である。

日本に陣法はなかつたといふ徂徠の錯覺

徂徠の立場は復古儒學であつて、日本古學の立場ではなかつた。道は凡て儒教の道なりと思惟して、日本固有の古道への自覺に缺ぐる所あつた徂徠が、兵法研究において、また日本古兵道の認識に缺げたのは、當然のことといへる。

其根元を尋ぬるに、日本に陣法なし。戰法は戰國の時分將士共に武勇にて戰場になれたるゆゑ戰法を自然と仕おぼえたるに云々。

是れは、「鈐錄」の「戰略篇」における錯覺の一例である。

素行と日本古兵道の自覺

素行は十八九歳にして孫子諺解（ゲンカイ）を著し、二十一歳にして兵法神武雄備集を著し、三十五歳にして、孫子句讀・武教要錄・武教小學・武教本論・武教全書・兵法或問（ワクモン）等を著し、五十二歳にして流謫中、武家事紀・七書諺義（ゲンギ）を著し、五十三歳にして、古今戰略を著した。孫子諺義・吳子諺義等はすなはち七書諺義の一部をなすものである。素行は寛文元年、四十歳にして朱子學より復古儒學に轉じ、その復古儒學の立場より聖教要錄を著したのは、寛文五年十月素行四十四歳の時であつた。そして其爲、幕府から罪に問はれ翌寛文六年十月、赤穗に流謫されて、謫居十年、五十四歳にして、延寶三年六月赦免、江戸にかへり、貞享二年六十四歳にして歿した。

謫居中、寛文八年の著作「謫居童問」ではなほ、支那を以て、中國乃至中華と呼び、孔子の教を聖教と稱してゐるのであつて、未だ復古儒學の立場を脫却し切つてゐないと見るの外ないが、寛文九年に著した中朝事實に至つては、我が日本を以て、中國乃至中朝となすと共に、日本の古道・神道を以て、聖教と稱することに改めてゐるのであつて、これはもはや復古儒學といふよりは、まさに日本古學の立場に立つに至つたものと見る可きであらう。

此の意味において素行の發展を跡づける上に寛文元年乃至寛文五年と共に否なそれ以上にはるかに重要なる意義を持つ時期として、「中期事實」を著して、日本古學の立場に立つた寛文九年を見落してはならぬと筆者は思ふ。寛文九年といへば素行四十九歳の年である。これが徂徠等の復古儒學者と素行が大いにその選を異にする所以である。そして「七書諺義」は、素行がすでに日本古學の立場に立つてから四年後の著作に係るもの、此の「七書諺義」の自序において、

本朝古今、兵を善くする者、皆な暗合す（武經七書の兵法に暗合す）。そもそも、天之を授くるか、神之を佑くるか、自ら蓋天蓋地の神兵聖武の存する有る也。何ぞ必ずしも、外邦の七經に待たんや。

と、日本古兵道への自覺を高らかに宣言したのは、まことに其の由つて來たるところがあるのである。然り、「何ぞ外邦の七經に待たんや」であるが、しからば、七書などは最早や我れにおいて學ぶに足らざるか。否々である。故に素行は曰く。

然れども、博聞多識は學習の通議なり。能く吾が邦の兵法を致して、而して後ちに、此の書に逮（オヨ）ばば、化してこれを裁し、推して之を行ひ、觸れて之を長じ、之を變通し、用ひて以つて、大成すべし。しからざれば、則ち多雜眩眞、終に家鷄を輕んずるに至らんか。云々。

世の孫子を讀む者、須く此の素行の研究態度に學ぶべきである。

日本古兵法固有の精神を闡明宣揚した觀山

素行による日本古兵道への自覺を承けて、さらに日本古兵法固有の輝かしい精神を大いに闡明し宣揚すべく努めたのは、北條流の兵學者松宮觀山であつた。觀山の名は今日餘り有名でなく、殆ど忘れられてゐるといつて過言でない程だが、彼は北條氏長の「士鑑用法」を承述して、「士鑑用法直旨鈔」をつくり、また自ら、「天地圓德卷詳解」、「武學爲初入門說」、「神樂舞面白草」等を著して日本流兵學の體系樹立に努めた偉大な先賢である。

觀山は下野の國に僧侶の子として生れ、後ち江戸の處士、松宮某の養子となつた。その出身において、觀山はすでに當時の兵學者中における異色であつたといつてよい。そして、其の生れたのが、山鹿素行の歿した翌年であつた。

觀山は、日本の古代には七書の如き、兵書の書かれたものこそはなかつたが、七書の兵理にも暗合する秀れた、兵法の實踐されてゐた事實をはつきりと看取し、次の如く論じてゐる。

ひそかに稽ふるに、神代の戰法口授つたはらざること、其の證明かなりと雖も、しかれども幸に、日本紀の載す所、考證の見るべきあり、理を以て、之を推す時は、其の陣制戰法得ていふべし。

とて、例をあげてこれを說明したるのち、曰く、

堂々巍々として四邊の固め、神籬磐境、鎭護嚴重にして、寶祚萬々歲、天壤と共に、窮なきの洪基、神代に備はりて、一つの闕ぐる所なし。豈に之を異方の敎を假るといはんや。又、何ぞ後世精密にして上世疎略なりといふべけんや。況や神代の陣法、知るべからずと云ふものは、書を見るの眼、未だ開けざるにあらずや。

とて、彼の徂徠が、「其根元を尋ぬるに、日本に陣法なし」との錯覺・妄論を論破して餘蘊なきに似てゐる。

さて、しからば、觀山の體系づけんとする日本流兵學の主要を觀山は何においてゐるか。「天地圓德詳解」にこれを說いて曰く。

當流の兵法、統て影に隨ふ習を主要とずるは是れ日神に背き奉らざる事。神武紀に曰く、皇師進んで戰ふこと能はず、天皇之を憂ひて、乃ち神策をみこころのうちに運して曰く、今、我れ是の日神の子孫にして、而して日に向つてあだをうつは、天道にさからふ也。若かず、退き還りて、弱を示し、神祇を禮祭し、背に日神の威を負ひ奉りて、影のままに、おそひつまむ。此くの如くならば、則ち曾て、刃に血ぬらずして、あだ必ず自ら敗れんと。是れ影に隨ふ習の起る所なり。

何事にしても天道にさからうて事成就することなし。天理に隨ひ天日にし

たがひ、事理不二にして、必勝の功を成す。我が國開闢の始祖、これによりて、天地と共に無窮の基を始め給ふなれば、後人仰いで法則とすべきなり。

といふのであつて、「何事にても天道に逆うて事成就することなし。天理に隨ひ、天日にしたがひ、事理不二にして必勝の功を成す」べく、「我が國開闢の始祖、これによつて天地と共に無窮の基を始め給ふなれば、後人仰いで法則とすべき也。」是れが古今一貫、日本流兵學の大綱領である。

ここにおいてか、孫子の兵法に對する學問的研究の勃興は、つひに、日本固有の古兵道古兵法への自覺と復興とに歸着したといへる。けだし、我が國體の精華の然らしむるところであつて、今日孫子を讀まんと欲する者は先づ、此の歴史的事實に深く思を致すべきである。

× × ×

支那兵法の字句的解釋においては北條流は山鹿流に若かず、而して山鹿は荻生に若かず。字句の解釋は何といつても、荻生が斷然第一に居る。しかも日本流兵學の樹立・體系化においては、荻生は到底、北條流・山鹿流に比すべくも無いのを惜む。けだし徂徠の復古は先秦文化乃至所謂支那先王の道への復古にして、日本固有の古道・國學への復古ではなかつた。漢學においては無敵の彼れで、支那の學者をも凌駕した豪傑だが、其の根底に我が古道への自覺と國學的教養とを缺除したことが、その救ひ難い弱點であつた。

徂徠は其の體系の雄大さにおいて、後ちの佐藤信淵に稍々比すべきものがある。信淵は其の博學的な思想體系を貫くに、「皇國神世の古紀は萬國道學の大元」なりとの古道精神を以てした。然るに、遺憾ながら徂徠には實に、これがないのである。

德川時代の孫子研究家表

山鹿素行	二二八二―二三四五	五十三歳、七書諺義を著す。
新井白石	二三一七―二三八五	晩年孫武兵法擇を著す。
荻生徂徠	二三二六―二三八八	白石と雁行。中年にして「孫子國字解」を最晩年卽ち死歿の前年に「鈐錄」を著す。
松宮觀山	二三四六―二四四〇	素行の歿した翌年に生る。享年九十五歳。
賴山陽	二四四〇―二四九二	觀山の歿した年に生る。二十八歳、「古文典刑」をつくる。

六、日本と孫子兵法の活用

東郷大將と孫子の兵書

俳人芭蕉は旅の行李に、いつも山家集一冊を携へてゐたと云ふ。いふまでもなく山家集とは漂泊の歌人西行の歌集である。

日本海々戰の東郷大將は三笠艦上の長官室に孫子の兵書を携へてゐられたといふ。いふまでもなく、孫子は支那春秋の世の陸將で、直接海軍の戰法を說いたものではない。元祿の俳人が鎌倉時代の歌集から、海の東郷大將が陸戰の古兵書から、俳句上の、或は作戰上の示唆と刺戟と鼓舞とを求めた所に味ふべき妙味があると思ふ。

幕末維新風雲の際に奔走した志士にして、孫子の兵書を懷にせざるは稀であつたといふが、今日、此の古兵書をポケットに携へてゐるものが幾人あらうか。

史家にして文豪であつた賴山陽は、「日本外史」を作るにあたり、支那の古い司馬遷の「史記」から項羽紀の一篇を自ら手寫したものを毎朝朗讀一過した。る後ち、執筆した。そして彼れは、これによつて、「力を得ること少からざるを覺えた。」と自ら記してゐる。

古典の有意義なる愛讀法——活用法がここにあると思ふ。古典をして新しき創造を鼓舞作興せしめ得る者は幸なる哉。これを古典の活用者——眞の愛讀者といふ。

孫子の兵法と未發の中

孫子の兵法は未だ發せざるに中るを期する。故に先づ勝つて而して後ちに勝を求める。所謂二つの可能性は紛れあたりを狙ふ當てずつぽう。故に先づ戰つて、しかしてのちに勝ちを求める。東郷大將はロゼエストウエンスキーの艦隊が必ず對島海峽に來るものと見當を一つに決めて、全艦隊を鎭海灣に集中。猛烈に射擊練習。百發百中を期して、待ち伏せしてゐた。果然その見當は美事的中。占めたり敵艦見ゆの警報。實力の滿を持して放つ彈丸よく命中。勝利はすでに未だ戰はざるに決してゐた。所謂二つの可能性をこれにたとへて見れば、悉く此の反對で恐らく次の如く云ふ。

對島海峽にやつて來るか、津輕海峽に來るか、玆に二つの可能性がある。それをどちらか一つに決めてかかるのは危險だ。一つにきめてはならぬ。果してどちらにやつて來るか、來てからでなければわかるものでないと云ふ。

そこで、これは鎭海灣に集中して待ち伏せしては居られぬ。日本海のまんなかに出て足ぶみして待つか、それとも對島と津輕に艦隊を二分するか、それともじつとしては居られず、對島と津輕の間を往きつ戻りつ右往左往してゐるか、とても射擊の猛練習なんか、落ちついてやつてゐるわけには行かず、徒らにあせつて、疲れて、迷つて來て、最後の迷案は、ロゼエストウエンスキーに、一體どちらに來るつもりか早く知らせよと、無線電信で問合はすことに決めて、自らの焦慮困惑を解決せんとするがおちであらう。

猫の首ッ玉に鈴をつけやうといふ鼠の名案のやうに。

然り名案にはちがひないが、御伽噺である。實行可能な戰策ではない。これでは敗北はすでに戰はざるに決してゐる。二つの可能性に勝利の可能性なし。

孫子が「勝兵は先づ勝つて、而してのちに勝ちを求め、敗兵は先づ戰つて、而して後ちに勝を求める」といふ、柳生但馬守に劍法の極意を說いて澤庵和尙が、「二途にわたりて分別きはまらざることをすれば必ず惡しし。これ血氣にまどはさるる也。此の事をなさんと思はば、一道に從ひてよし。二途にわたる程ならばすべからず、」といふは、思ふに斯くの如きをいふのである。

マカロフの敗因

旅順港封鎖作戰の東鄕提督が三笠艦上の長官室に携へてゐられた兵書に孫子の古兵法とマカロフ提督の海軍戰術書とがあつたといふ。

孫子の兵書は、此の古典の愛讀から主將としての心得と、作戰の示唆乃至刺戟とを受けんがためであつたらう。

これに反して、マカロフ戰術書の檢討は、思ふに、此の世界的に名ある大戰術家を好敵手として戰ひ勝たねばならぬ東鄕大將である。やがて實戰において彼れを擊破すべく、先づ彼れの戰術論を仔細に檢討し、其の弱點をつぶさに讀破するがためであつたにちがひないと、筆者は考へる。

○値切つて見よ、其の名の如く負からう（マカロフ）ぞ。

筆者の句である。海上戰術家として世界的に聲價甚だ高かりしマカロフ提督が値切られる日は果然到來した。

其日、日本の驅逐艦數隻、港口近く迫り來つたとの報告に激怒して、なにを小癪なと、にはかに出動命令を發し、旗艦を港外に乘り出した。いつもは港外を掃海して後ちに、出港するのを、其日に限り、あせつて掃海も行はずに飛び出した。するとどうだ。爆音俄然、天に轟くと見るや、一巨艦は忽ちにして、爆破沈沒してしまつた。見よマカロフの旗艦である。

斯くと待ち設けて敷設されてゐた機雷に觸れたのだ。釣出されて思ふ壺にはめられたのである。激怒に驅られたためだ。

孫子の兵法は將の五危といつて、主將たるもののいましむべき五つの危險を數へてゐるが、これを知らざりしか。かくして聲價甚だ高かりし大戰術家も値切られて、其名の如く負けてしまつた。いはば孫子の兵法に負けたのである。

勝つ者は斯くの如し

一、第一報

○敵艦見ゆと占めたり天氣晴朗。

露艦隊の通過を對島海峽ときめて待てる艦隊が二〇三地點に露艦隊見ゆとの警報に接したる喜び。占めたりの一語に表現される。天氣晴朗とは露艦隊を見失はない程度に晴れてゐるといふので、實は相當の海霧があつたことは、戰鬪詳報に、「此日海上濛氣深く、展望五浬以外に及ばざりしも」云々とある。

二、豫定の如く

○占めたり、作戰、圖に當り。

占めたとは、豫ねての見當が外れず、ちやんと當つた所に、おのづから發す

る喜びの聲である。信濃丸からの無電に接して作戰參謀は「占めたしめた」と叫んでゐたさうな。對島海峽ときめてゐた戰略家には、さもあるべきことである。此の「占めた占めた」の叫びに感激を覺えぬやうなものは、俱に戰略戰術の事を語り得ぬと思ふ。

三、絕好條件

○絕好條件、天氣晴朗にして波高し。

天氣晴朗なれども波高しといへば、波高しは不利なる條件かの如くひびけど、此の時の事情は、日本側における射擊の練磨と乾舷の高い關係から、波高きことが日本艦隊にとつては、却つて有利なる關係であつたから、好條件は精確にいふならば晴朗と波高しとの二つであつたから、天氣晴朗にして波高しの意に解すべきであらう。

四、取舵一杯の手(術)

○敵前にさつと右手(ミギ)を擧げて左一杯(ヒダリ)に(又は左半圓に)振れる手かな。

嗚呼此の一擧手——戰ひはここに取舵一杯、大膽不敵の丁字戰法をもつてはじまつた。

此の手は敵前六千米に俄然、取舵一杯の相圖——すなはち丁字形を命じた相圖——の手。實體的の手であると同時に、丁字形戰法の術といふ意味の抽象的の手でもある。

五、丁字乙字の長蛇

○衝蛇(ゴウダ)迎へて丁字乙字の長蛇かな。

トラフアルガル海戰におけるネルソンと正反對の陣法を以て、從つてネルソン以上の成果をあげた丁字戰法であつた。

衝蛇は二列縱陣、長蛇は單縱陣。孫子に常山(ジヤウザン)の蛇といふは、すなはち長蛇陣の事である。

六、衝蛇ながら

○ネルソンならば長蛇突破の衝蛇ながら、逃げんとす。

ネルソンは衝蛇陣をもつてフランス・スペイン聯合の長蛇を突破するの戰策に出でしに反し、露艦隊は同じく衝蛇ながら、成るべく戰ひを避けて、ひたすらに浦鹽へ逃げこまんことを以て戰策とした點に著しき相違を見る。

七、負くる者は斯くの如し

○戰ふよりは遁がれんことに急にして負けしも道理。

けだし露艦隊の大いに敗るるは必然であつた。決して偶然に負けたのではない。

八、對島と決めて待つて

○戰ひは對島と決めて待つて勝ちいくさ。

對島海峽ときめて、鎭海灣に待つたこと、そこに戰略上の最大苦心が存する。そして待ちながら、射擊猛訓練により、射擊において、確乎たる自信を獲得したること。勝利はすでに、大半をここに決してゐたといへる。

九、勝つ者は斯くの如し

○勝つ者は戰ふ前に勝つて居り。

兵法孫子の逆說的な言句に、「勝つ者は勝つて而して後ちに戰ふ」といふは是れであらう。

十、むすび

これを要するに、日本海々戰の戰略及び成敗の數について見れば、戰ひは、對島ときめて待つて勝ちいくさであり、勝敗は既に戰ふ前にきまつてゐたことを爭へぬ。孫子の逆說まことに人を欺かざるを知るべきである。

○謙信の車がかり

入りかはり立ちかはり新手あら手の車がかりに攻めかかる哉

○車懸と丁字戰法

謙信が車がかりを海にして東郷丁字の通うせんぼ。

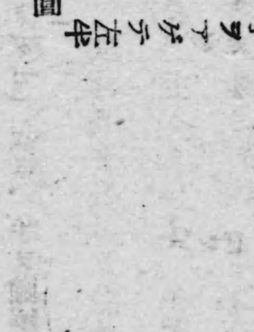
○丁字形と通うせんぼ

丁字形、なんの、大(ダイ)の字、通うせんぼ。

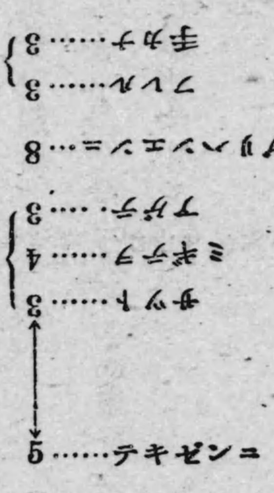
丁字形戰法の手の句圖解

○敵前ニサツト右手ヲアゲテ左半圓ニ振レル手カナ

五月二十七日午後、日本海々戰ノ劈頭。敵前六千米ニ俄然、取舵一杯ノ相圖ニスナハチ丁字形ヲ命ジタ相圖ニノ手。其手ハ實體的ノ手デアルト同時ニ丁字形戰法ノ術トイフ意味ノ抽象的ノ手デモアル。ロシア艦隊ノ衡蛇二列縱陣ヲ迎ヘテ、日本艦隊ハ長蛇單縱陣デアツタ。



コレハ、衡蛇長蛇ノ對勢ヲ示シタノダガ、次ニ、手ヲ圖解スレバ——



スナハチ敵前ニ(ノ音數五音)—ニ對シ、サツト右手ヲアゲテ(ガ十音)、左半圓ニ(ガ八音)、振レル手カナ(ガ六音)ニテ、—イヅレモ、五音ニ對シ、其ノ進路ニ大ノ字ナリニ、立チフサガリ、コレヲ蔽ウテ、通ウセンボヲシタコトヲ示ス。ソシテ、サラニソノ通ウセンボヲ仔細ニ見レバ、サツト(三)アゲテ(三)振レル(三)手カナ(三)—ガ、イヅレモ三音ノ同音數ニテ、相應一致ヲ示シテヰル。

兵法と死生

凡そ人、死を必(ヒツ)すれば却つて生き、生を必(ヒツ)すれば却つて死するは、古來兵書の皆な一樣に論ずる所にして、謙信の壁書にも、死なんと戰へば生きるもの也。生きんと戰へば死ぬるもの也といつてゐるが、孫子兵法は、九地の一に死地なるものを數へて、これを往く所なきの地とし、死地にては疾(ト)く戰へば、則ち生き得るが、疾く戰はざれば則ち亡ぶ外なしとして、死地には則ち戰へといひ、それ故にまた將たるものは、死地にあつては、兵に示すに生意なきを以てすといひ、之を死地に陷れて然る後ちに生くといふ。所謂死中、活有る所以。背水の陣によつて、活路を開くも亦、是れ死を必して生きるもの。飛行機が空中戰鬪において、身を以て當つて碎ける——體當り戰法が不思議にも敵のみを粉碎